

かはりもの

ツたりけりと、忽ち左右より取り附いて、

「晴劍殺々々々、敵手も敵手にこそよれ、ありや鬼神が化けて出た花の姿ぞ、公儀大奥の裏と表に根ざしの深い青柳、伊達振子の高島左近ちや、うろく狼狽へて向はゞ身代破滅の木ツ葉微塵」

や、その伊達振子が面白い、きゝ及ぶ高島左近め固より望むところの喧嘩對手ちや、まだ乳臭い分際で此の大江戸を人も無けなる振舞、しやツ面ひんむいてくれるぞ、入らざる無用の好奇と言はゞ言へ、持ツたが病の赤井彌兵衛、骨が鳴り申す、皮肉が躍ッて勘忍ならぬ、とめたとして止まる男と思ふか、そこ退いた、そこ放せ、後日の批判に味方あつたといはれては恨むぞよ、第一が足下等の爲になるまい、

いふや否、兩袖さツと振り切ッて名に得たる燕の彌兵衛、三間あまり一飛びに飛び出しぬ、

かくと見たる高島左近、何事かは知らず、馬前の手振奴もろとも蹄を止めて、馬後の槍持を近づけたる體に、さらぬも八幡きかぬ氣の彌兵衛、はや破れる編笠脱ぎ捨て、現はしたる大額、雙方ともに半町足らずの今更、もはや詮なし、いざや武士冥利、いたづらの見物もなり難しと、残れる朋輩三人いづれも彌兵衛につゞいて走せ出せば、彼方の高島左近いよく我に事ありけりと思ひけむ、手綱引き絞ッて鞍坪に乗り上りぬ、

廣くいはゞ武藏野の原、狭くいうても八百八町の大江戸に、高が五尺の人間た

かはりもの

かはりもの

一人、いかに肩胛張ッて歩めばとて寛活伊達を盡して歩めばとて、我家の軒場を貫き我身に當るでもなく、まして親兄弟の仇敵でもないものが何の支障に  
なるべき、さるを人傳に聞き及んで忽ち癩癩玉が湧き返り眼前に出逢うては身  
代破滅も絲瓜の皮と思はず、我を忘れて百年の生命を一朝の腹癒せに失はむと  
する男、なるほど持ッたが病の赤井彌兵衛、朱を注ぐが如き満面に眼を怒らし  
ながら、この鼻柱に小皺を寄せて冷かに笑へり、

「これは風聞に聞けど、今ぞ近寄ッて目に見るが始めての高島左近殿とやら、  
何は儲置き、小唄に唄ふ伊達振子の振り鹽梅を親しう見物いたさうが爲め、今  
朝わざ／＼こゝに待ち受けたる執心の男で御座る」  
聲もろとも大手を擴けて仁王立の猛勢、眼ざし面魂まで思ひきッたる體なり、

高島左近が馬前に立ッたる手振奴は、いづれも武家奉公に一粒選の荒男、かく  
と見るより六人一時に立塞ッて遮りぬ、

「おのれ狂氣か亂心か、蹴散らして奴姓骨踏み抜く奴なれど、場所柄といひ今  
御下城の折なればこそ、生命冥加のあるうちに立退け、立退け」

「や、吐したり奴ども、殊勝ながら下郎に用なし、其所おッ開いて主の左近を  
出せ、元來の仇も報いもなければ、まだ齒も揃はぬ乳臭い分障で、この大江戸  
を伊達に振り行く人形身振が笑止さに、いさ／＼か折檻してくれる深切男に三拜  
せい、這ひ蹲ッて砂をも舐れ、は／＼／＼／＼どりや面倒ながら手をかけて膽魂の  
ありやなしや」

試して見むと躍りあがる左右前後より、奴どもが組み附いて必死に争ふ體を、

かはりもの

かはりもの

馬上の左近しづかに見下しながら鬢の毛一筋も動かさず、たゞ槍持が差出したる千段巻に手をかけて大地に突き立てたるまゝ、笑を含んで、

『面白いぞ、面白いぞ』

赤井彌兵衛は固より得たる燕の彌兵衛、目にも止らず身を躍らして八方に飛び廻りしが、奴のうちの一人、もはや手捕になり難しと思ふや否、すつと抜き放せし白刃の閃影に彌兵衛また抜く手も見せぬ二尺七寸の早業、それと見るより遙の彼方に汗握つて見物せる赤井が朋輩三人も、今はこれまでなりと抜き連れて走せ来る勢ひに、六人の奴また抜き連れて巴の如く入り亂れつゝ、十人の敵味方こゝに一朝の修羅場を現じぬ、互の矢聲、打ち合ふ双音を、をりしも照り添ふ夏の旭に輝いて、遠く望めば白銀の針を弄ぶに似たり。

かはりもの

何者の狼狽へたる白癡ぞ、しやツ面の物々しい奴原かなと、さらぬも満身これ膽の花冠者と呼ばれたる高島左近、さつと馬より飛び下りて一心無敵の金札うツたる芝の笹葉槍、鞘を突き飛ばして晝がける如き美顔に朱を注ぎつゝ、

『者ども助太刀の奴等を討ち捨てい、はじめの廣言吐いたる男は我が槍先の一興、かゝれ来い、高島左近なるわ』

聲もろとも劔刃の中より飛ば出したる赤井彌兵衛、はや數個所の淺疵を負ひながら奴三人まで物の美事に斬り付したる死物狂ひの猛勢、おのれと叫んで血糊の大刀眞向に振り被れば、まツたる奴ぞと槍を閃かして突き出す稻妻の活動、蹴あぐる砂煙の中に三四合の双音高く響きしと思へば、電光石火、さても無用の生命かな、彌兵衛は腰車を田樂刺しに貫かれて迸しる血汐と共に斃れながら、

かほりもの

今を最後の一念に拂うたる白刃は左近が槍の千段巻より芋殻の如く斬つたるのみか、一心無敵高島左近源國宗十九歳と記せる例の金札を兩斷に割つて宙に飛ばしたるが、せめて彌兵衛が冥途の語草なりけり、

わづか瞬間の活動なりしが、流石に剛敵を引き受けて總身に徹えけむ、高島左近、ほつと大息ついて見返れば、此の時すでに敵の助太刀三人も仆れて我奴六人のうち息あるものは唯一人、それさへ刃を杖ついで立ち得ぬほどの深疵のみか、はや見附の番所々々より聞き傳へて役人の走せ來る體に、南無三寶、下司の雜人原にかゝりては家名の恥辱ぞと、俄に斬り折られたる槍もろとも兩斷に散つたる金札を拾うて鞍に飛び乗るや否や、雙鎧を合して幕地に馳せ出しつゝ、時の執政松平伊豆守が門前に馬を乗り捨て、靜に立關へ向ひつゝ、

「これは高島左近と申す直參の一騎、只今さる仔細あつて、御場所柄を存じながら己むを得ず相手四人を仕留て参りし者、御迷惑なれど御取扱ひを頼み入る」  
いふ顔見れば花菖蒲、雪の額に翠の黒髮亂れかゝりて敵の血糊を浴びし風情、古今無雙の美男だけに猶更ら訝えて物凄し、

さては當家を見込んで直參衆の驅け込みぞ、追ひ來る敵あらば門前一步も踏まずな、蹴散らせ踏み返せと立ち騒ぐを、左近しづかに會釋しながら左右を振り返りて笑を含みつゝ、

「いや〜。御無用々々、もし追ひ來る敵あらば生命無事に驅け込む者で御坐らぬ、たゞ暫時一室を御借用申して、此よし御主人への御取次たのみまるらす」

かほりもの

かばりもの

高島左近は幼少より將軍家の膝下にて人となりし身といひ、大奥に匹敵なき老女の出頭二人までを祖母に持ち、しかも武功の家に生れて世上の小唄に唄はるゝほどの名物男、また天下政道の諸老にも多年朝夕の親しみ深ければ、賣り付けられたる喧嘩を買うて三人四人を殺せばとて、さらに何の詮議のあるべき筈なけれど、如何にせむ、敵手の赤井彌兵衛も身分こそ左近に劣れ、音に聞えたる直參の一人、その助太刀したる三人の有輩また直參衆なれば、陪臣者の慮外を手討にせしとは同じからで、俄に事むづかしき詮議となりつゝ、そのまゝ松平伊豆守が許に預けられぬ、

伊豆守、一夜、左近を奥まりたる一室に誘うて、みづから手前の抹茶を進めつゝ、人を退け慇懃に問うていふ、

「過日の一條に就いては、じたい何と思はるゝ、まづ足下の御料簡を承りたい」

「これは事あたらしき仰せ、かく御預けの身となりし本人の拙者が、今更ら何をか料簡仕るべき、たゞ偏に上の御沙汰を相待ち申さうのみ」

「なるほど、過ぎて返らぬ仔細は言はれず、神妙に覺悔の體、流石は左近殿、さりながら、あの時、あの喧嘩に就いての御分別は」

「されば、それとても今は詮ない事ながら、もしあの時に、敵手の男が尋常に名を名乗り拙者に刃向ふ仔細ばし語らば、あれほどの荒々しき儀もなく、また何とか工夜のありしものを、何が儲、不意に現はれて悪口さんぐ、寸隙もあらせず、忽ち討ツてかゝりし無禮の振舞、しかも續いて三人の助太刀、此奴等も打物の作法を心得ざる無言の慮外千萬、たとひ上意なりとて其の場の勢ひ

かばりもの

かはりもの

武士の一分に容赦のなり申すべきや、まして名もなき下司の狼籍と思へば、は  
 々々々されど狂暴にせよ何に致せ、その敵手が直參の赤井彌兵衛とは案外の事、  
 結局は拙者の不運、いたづらの喧嘩沙汰となつて生き残りし一身を兩成敗に果  
 す段、神もつて未練には御坐らねど、何とやら惜しい心地、おなじうは萬倍不  
 敵の剛の者を引き受けて天晴れ名譽の働き死を致したう御坐つた、いや、これ  
 も過ぎて返らぬ愚癡、たゞ謹んで御沙汰を相待ち申すのみ」  
 伊豆守、おもはず涙を浮べて膝すり寄せながら、燈火を退けつゝ、

「心中お察し申す、さて此の度の一件に就いては、大奥に在する  
 よりも、たゞ一人の愛孫なりとて内々の御歎願あり、我等も及ばずながら多年  
 の間柄、わけて第一、君にも幼少より御手許に召使はれたる足下の事とて、し

みく御不便には思召せども、先例法度の重きには代へ難く、まことに心外千  
 萬。いたし方もない御氣の毒の儀に御坐る」

「かたぐ勿體ないこと、身に餘つて嬉しうは御坐れど、幼少より君前伺候の  
 拙者、また大奥に由緒の拙者、なほさら以て世上の口の端も煩し、願はくば一  
 時も早く御成敗に預かりたく、萬事は御身分が貴方様の御取計らひにて、早  
 くの御裁決を頼みまゐらす」

「さてく見事の御覺悟ぢや、それでこそ人にも唄はれし高島左近殿、まだ春  
 の日の浅きに可惜ら蒼の花とは存すれど、また散ればこそ世にも惜しまるゝ花  
 の色、さらば無残ながら、取急いで明日の事に致そう、それに付き、もしや御  
 遺言ばし御坐らば、何に致せ身に引いて承るぞ、そと申されい」

かはりもの

かはりもの

「御芳志の段は、千萬承う御坐れども、そもく十三歳の曉より十九歳の今日まで、いつ如何なる事にて何れの場所に身を果すとも、さらに一言の世に遺すべき儀もないやう、平生より聊か心掛けし拙者に、もし最後の願意を申せとならば明日切腹を仰せ下さるゝ時、何卒、古法通り拙者おもふまゝの儀に御任せ下されたし、きけば近來、直參の者が御檢死を乞うての切腹は殆ど名目一片、儀式ばかりの由にて、みづから屠るではなく、その實は介錯人に首斬らるゝも同然との事、これは全く其者に苦痛をさせまじとの御仁心かは存せねど、人にこそよれ高嶋左近、名を汚して最後の見苦しき體は仕るまじき覺悟、されば明日のところ御介錯人を御免蒙りたし、せめては現世の餘波として諺にいふ其盤の目形とやら十文字の早業を、後の手本に致したき本意で御坐れば」

「や、よくぞ言はれた、その儀なら上聞に達して檢死の面々も天晴れ人を選び、萬事の用意を届くだけの曠業と致さう、我等家來のものどもへも申し聞け、この名物男が死する最後の伊達寛活を唄はせすばなるまじ、さるにても可憐ら花、あたら花の一盛り、あゝ夢で御坐つたなう」

「夢も夢、秋の夜の長うもなく、短き春の曉に、とろくと睡眠みし轉寢の夢で御坐る、はゝゝゝゝ」

花も月も十九年の春秋、おもへば短き浮世の夢なりけり、されど百歳の生命を保つものなれば、おくれ先だつ草の露、いづれ落ちて消ゆる曉の空に間もあるまじ、いざや最後の筆の跡、ありし人々への暇乞せむと、残んの燈火かきた

かはりもの

て、硯引き寄せ墨磨り流しつゝ、まづ父に宛てたる親子一世の死別には流石に涙の文字、大奥に在する二人の祖母君へ曇り勝なる筆の運び、やうくをさめて以上の三通に鬢の毛を巻き添へつゝ、やがてまた何をか思ひ出せし體、なほ誰にか一通を認めむとせしが、俄に引き破りて其の反故を丸めながら、兩眼を閉ぢて差俯きし折しも、はや明け放れゆく東天の空に鴉の一聲二聲、高島左近、きつと容を改めて居坐を直しぬ』

折しも次の室に夜を守りし當家の坊主、障子の外より恭しく聲をかけぬ、

『もはや明方に御坐りまする、御嗽を捧げませうや』

三人の坊主が慇懃に差副へて、嗽を濟ませ衣服を改めつゝ、誘はれて設備の一室に打ち通れば、青葉しけれる夏木立の庭に對うて廣縁の障子を開け放ち、

そよくと吹き送る朝風の涼しさに、どこともなき名香の香馨ゆかしく、捧け出す一服の抹茶を受けて靜に心氣を洗へば、あたら十九を一期として今日この生命の死する身とも思はれず、仔細ありとて朝齋の膳を退けしほどもなく、主人の伊豆守、はや出仕の姿そのまゝにて入り來りぬ、高島左近しづかに坐を改めて頭を下げつゝ、

『このほどより段々の御芳志も、もはや今日かぎり相成りました今日のところ、なほさら以て宜しく願ひまする』

『いよく、今日は、伊豆こと、御挨拶の致しやうもなき次第、せめて、昨夜の御所望、御最後の花を添へむと存するのみ、ついては、これより登城いたし、委細上聞に達せし上、まづ老中にて當今の人品、阿部豊後守同苗對島守の兩



かはりもの

家を御使者に乞ひ、御目附中の男振では誰で御坐らう、まづ喜多見久次郎殿で  
 かな願ひたき心體、萬事の用意は及ばずながら伊豆が寸志」

「これはく高島左近、若輩未熟の身に取ッて過ぎたる御取持、謹んで最後の  
 見苦しからぬやう心得まする」

「さらは後刻、あらためての席にて御意を得まするぞ」

「ますく御機嫌よろしく、いよく御繁昌のほど、蔭ながら祈りあけまする」

「伊豆よりは、たゞ今日の御最後、天晴れ美事に祈りまする」

「おさらば」

互に落す露の一半は、千萬無量の哀れを含みぬ、

主人の伊豆守が登城の後、みづから鏡に對うて隙間なく頭に名香を磨り込み、  
 あらたに人を呼んで髪を結はせ、いざとて湯殿へ行きつゝ、いつよりは心靜に  
 五體を洗ひ清めながら、裕衣のまゝ次の化粧室に立ち出づれば、坊主と思ひの  
 外なる十八九の美女、差俯いたるまゝ顔も得あけず身を打ち伏す體、花一輪の  
 雨に艱めるが如し、

男一代、今日を晴の死際に、今更ら女の給仕とは心得ぬ業かな、家柄にも似ざ  
 る無作法千萬ぞと、そのまゝ見向きもやらず立ち出でむとする袖、そと捉へて  
 振り上げし花の顔を見るや否、

「や、そゝ其女は何としてこれへまるツた」

「何としてとは、お恨めしう存じまする」

かはりもの

かはりもの

いふ聲さへ餘所を憚る涙に曇りて、そのまゝ泣き伏しぬ、

「えゝ、うろたへもの女、自邸でもあることか、今この身となつて、しかも晴れがましい他家に居る我を、但し當家よりの圖計か」

「昨日の朝、御當家よりの御使者として、御家老の田原様とやら、もし左近殿が、平生の御意に叶ひし御召使のもの御坐らば、男女にかぎらず、しばし來て御介抱を申し上げよとの仰せ」

「それに致せ、人もあるに、其女とは」

「これは親殿様の御意、いかに武門の情とはいへ、人らしきものを遣はしては上への恐れ、誰彼といはうより、近來わけて子息が手許の用に慣れ顔なる侍婢の小浪こそ宜けれ、そと彼奴を遣れとの仰せにて」

「むゝ、父上が、さ仰せられたか」

「せめて、せめての御餘波に、この小浪へ、尼になれとの御言葉を」

「あゝ、益もない事をしてのけた、わづか二十歳に足らぬ露の身に」

なはりもの

阿部豊後守と同苗對馬守の兩人、上意を承りて松平伊豆守が屋敷に向ひ、かねて用意の小書院に暫時休息の後、はや時刻なりとて高島左近を呼び出せば、あらたに調へたる麻の上下を着して無腰のまゝ、音もなく座に進みて遙に謹慎の體、みれば花の朝、月の夕、君前伺候の色香を添へし平生の風情に異ならず、たゞいつもよりも名香の匂ひ涼しく四邊を拂うて薫するのみ、

兩人の使者も左近が幼少より殿中の朝夕に馴柴を重ねし間柄とて、一入さらに

かはりもの

ものゝ哀れも深く、思はず兩眼に涙を浮べながら、しづかに上意を達して切腹を申し付けぬ、此時、左近、やう／＼頭をあけて使者に對ひつゝ、

「上意のほど、謹んで有難く御受け申し上げまする、今更ながら、多年君恩の重きを忘れて軽々しき今日の不忠と相成りし若輩ものゝ不所存、折もあらば御兩所より、御前よろしく御執成を願ひ奉る」

言葉の端々さらに死に迫れる風情なく、左右の鬢の毛一筋も動かさず、名畫よりの脱け出でたるが如き顔面に微笑を含める體、天晴れ膽かな、急所は五體の何處にあるかと疑はれぬ、

兩人の使者が袖をしほりて歸りし後、今日の檢死に選ばれたる御目附の喜多見久次郎は左近がため母方の伯父に當れるもの、わざと一滴の涙も目に持たず、

はや小書院の庭を圍ひし設備の席に立ち出でて待ち受ければ、無紋白衣の上下に身を改めて、しづ／＼と座に就きし左近の體、傳へき伊達振子の伊達切腹を見物せむとて、かねて許されたる當家の諸士は物蔭の隙間より片唾を呑んで拳を握りつゝ打ち守りぬ、

「今日の見届役として喜多見久次郎で御坐る、尋常に覺悟せられい、承れば兼て介錯人無用の儀を願はれたるよし、なほさら以て武士一代、まことに大切の晴業と存する、まだ時刻もあれば、もし其の以前に望まるゝ用意ばし御坐らぬか」

「御役目御苦勞に存じまする、何が儲、上の御慈悲、わけて御當家の行届いたる御設備といひ、高島左近が露の生命の捨所には過分至極の御用意、たゞ徒ら

かはりもの

かはりもの

に時刻を待つも恐れ多し、さらば御免を蒙ッて、このまゝ直ちに」

「覺悟さへ宜しくば、檢死に於て仔細なし。いざ」

無紋の上衣を跳ね退けて膝下に折り數き、奉書の紙に巻き付けたる九寸五分、鋒鈍ひらめきて秋の月夜の霜に似たるを右手に取るや否、左手に残る白木の臺を取って背後に差廻しつゝ、しづかに目禮しながら今ぞ最後の死身を整へし時、檢死の喜多見久次郎、そと立寄ッて其の九寸五分の奉書を解き、じつと白刃をあらためし後、おのが懐中より別に取出したる奉書の厚重ねもて拭ひぬ、

「左近、これは其方が父よりたのまれて、受取りし懐紙ぢや、紙に香氣の油を染ませて刃觸りを滑かにせむとの注意、せめて父子の名残ぞ、たゞ、しづかにしづかに、氣を急くな、たしかに切れ」

聲を潜めて私語けば、今の今までも死を見ること餞の如き高島左近、はらくと涙をこぼしぬ、伯父の喜多見は猶更ら辛き武士の習慣、一際さらに聲を激ましながら」

「喜多見久次郎が見届けまするぞ、高島左近、當年十九歳」

「はッ、憚りながら差寄ッて、しかと御檢死を下されい」

世諺にいふ碁盤の目形、みごと腹十文字に搔き切ッて苦しき息も漏らさず、體も亂さず、そのまゝ前に伏して眠れる如く絶え果てし終焉、までさながら古昔の物語り今見るは始めて天晴れ剛のものかな、さても膽魂の確實なる男よ、いきて三十の曉には元來どれ程の不敵になるやらむ、さても怖しとて舌を巻ぬ、

かはりもの

かはりもの

名にしおはゞ、いざこと問はむ都鳥と、むかし男が歌枕の袖しほりし隅田川も、今は浮世に連れて遊山船より漏るゝ色絲の音じめ絶え間なく、わけて花柳の戀路を渡す橋場口には、ありやなしやの心配もなく、我おもふ人と相合傘の江戸繁昌、こんな楽しい面白さを旅寝の乾飯喰うて泣いて渡った業平奴は野暮の骨頂とぞ嘸しぬ、

折烏帽子きたる渡守は繪空事となりて、古手拭の頬被りしたる船頭の鼻唄、夏の朝夕は血氣の棹にまかして忙しけれど、眞晝のところは五十あまりの年老いたる老舟夫、うとくと岸邊の樹蔭に居睡りて、ひとり二人と落ち合ふ客の八九人となるまでを待ち受けぬ、

折しも打ち連れて商人體の男三人、しかも互に知人の間柄とて大汗拭ひながら腰巾著の鳥目を抛け出しつゝ、急用ぢや、三人で十人分の舟賃、さア受取つて漕いだくと急ぐ聲に、今まで居睡りし樹蔭の老舟夫、やうくと起きて岸に下りつゝ、繫ける舟を解いて、一棹さつと漕ぎ出しぬ、

『やア暑い〜といつても舟で漕ぎ出した心持はまた格別、ちと抹香臭いことながら、こりやア現世の風であるまい、なう船頭衆、我等のやうに膏汗流して市中を驅け廻る目からは、居睡り半分に来る客を引き付けて棹一本の渡世、しかも夏しらすとは羨ましい』

『は〜、何いはんすぞ、船頭にも冬が御坐ります、此方衆が火桶を抱いて窓越の雪見でもなさらう時は、この老爺が氷の化物となつて筑波おろしに空腹を吹き抜かるゝ頃ぢや、春の花も秋の月も餘所から來ての快樂、山海の珍味で

かはりもの

かはりもの

も器になる皿鉢の身が何の面白からう、はゝゝゝまして斯う老老れては猶更忙しただけに骨折申斐のある朝夕は若い奴等に漕ぎ取られて、いやもう猫の兒も屋根裏に睡る今頃の一人役』

「いや、物の不足をいへば誰もあること、ところで幾歳ぢや」

「はい、もう人間の定命を越えて、浮世の九歳を偷んで居ります」

「むゝ、五十九か、なれど年齢よりは外見が若うて、その達者が何よりの幸福ぢや、どれほど身分が歴々でも伊達振子の十九では、人間の算盤珠に合はぬ、苦勞しても長命が第一の徳、死んでは花も園子も、あるものか」

「や伊達振子の十九で、算盤珠に合はぬとは、じたい何の事で御坐ります」

「なるほど客商賣して居ても流石は場末、まだ知らぬか、江戸の市中を伊達で

振り切った小唄の高島左近といふ人も、その振り鹽梅が利き過ぎての喧嘩から、今年十九の辭世、切腹して死んだとの風聞ぢや、これを思へば身分のない方が結句の氣樂さ、もし町人風情ならば、腹切らいても坊主になるか謝罪證文の一通か、親類立會の御意見御尤で埒明くこと、それも叶はずば闇に紛れての梵天國でも濟むものを、歴々のお歳家だけに笑止千萬、なれど、その腹の切りやうが、

「近來また小唄に残る程の伊達切であつたとやら」

かくと聞くより此の老舟夫さらに何とも言はず、俄に老の身の筋骨を現はして矢の如くに漕ぎ出しつゝ、對岸に著くや否、またこゝにて待つべき筈の客もなき空舟そのまゝ、えいゝ聲に漕ぎ戻して橋場口に飛び上り、わづか半町足らぬ

かはりもの

## かはりもの

自己が家なれど一散に走せ歸りぬ、

人めさへ枯れて淋しき夕まぐれと歌ひし浅茅が原にも味噌醬油の通路つきて、  
 旅の姿をうつせし鏡が池、あはれを殘せし袈裟掛松の名所さへ、をりく訪ひ  
 來る歌人の手向となりつゝ、隅田川に添ひし石濱の昔も今は橋場の町つゞき、  
 うき旅の道に流るゝ思ひ川、涙の袖や水のみななみといふ、その思ひ川と眞崎  
 稻荷の片外れに、やうく膝容るゝばかりの草屋ながら、茂れる柳の蔭闇きと  
 ころに柴折戸を閉て、垣根越に網干の見ゆる體、わざとならぬ風流に叶ひぬ、  
 されど主人の老爺は風雅でもなく洒落でもなく、渡りかねたる浮世を渡らむと  
 ての侘住居に、其日々々の人を渡すが渡世の船乗も、老いては若き昔日に劣り

て家一軒に人ひとりの朝夕、水刷棹の片手間には網もて雑魚を漁りながら、おの  
 が一合の酒にも添へ人にも賣りて、垣根を流るゝ思ひ川の越水に河骨の花咲く  
 を逃めつゝ蚊遣火の蔭に漣團扇の音さす夕暮の一時が、せめて老の我身を慰む  
 る、獨樂とぞなりぬ、

をりしも門邊に下せし一挺の駕に、附き添ひし仲間の男三人が背負ひし物を運  
 び入るゝと共に、得ならぬ匂ひ薫じて駕より現はれ出でしを見れば、さらぬも  
 眞白の富士額に厚化粧の大前髪、張り切つたる黒眼勝の臉邊に何所となく憂苦  
 を含みながら、玉蟲色に青みかよりし口紅の床しさ、地藏の撫肩すつと立ちし  
 柳腰の風情は、誰が目にも武家奉公の奥に育ちし年のころ十八九、銀の平打は  
 照り返す川水に映じて、露か玉かと疑ふ胸帯の小道具、脚下の草履まで音なく

## かはりもの

かはりもの

静しづかに歩あゆみ入いれば、主人あるじの老爺おやぢ、かくと見るより今更いまさらに打ち驚おどろいたる體てい、

「おゝ小浪こなみか」

「父様ちちさま」

「まゝまづ上あがれ、何なには儲置たくわき、今いまごろ俄にわかに何なにとしてぢや、これは二人ふたりの衆しゅう、御ご覽らんなされます通りかまの荒廢家あはれやで、わざ／＼これまで御苦勞ごくろうのお待遇もてなしせうにも、はゝゝゝこれ小浪こなみ、和女そなたから宜よろういうてくれ」

我子わがこながらも、一年ねんに一度いちども逢あふや逢あはずで、十二じふにの年としより今日けふまでの武家奉ぶけほう公こうに差上さしあげたる親心おやごころ、今更いまさらに見みかはすばかりの美々びびしさに我身わがみを恥はぢて何なんとやら、たゞうろ／＼とする體ていに、二人ふたりの仲間ちゆうけんも氣きの毒どくがりて軒場のきばより空そらを見上みあげながら、

「や、日脚ひあしが變かはつて夕方ゆふがたまでは持もたぬ雲行くもゆき、兩具ふたぐもなければ濡ぬれぬ前に、さて老爺殿おやぢどの、委細ゐさいはお娘御むすめごから、實じつは此度このたび、御屋敷おやしよに思おもひもよらぬ大事だいじがあつて取込とりこ最中さいちゆう、それゆゑ我々われわれがお供申ともまうして送り届こけましたぢや、いづれ其そのうち改あらためて、御沙汰ごさたのあるまで暫時ざんじの間あひだと、御用人ごようじんからの口上こうじやうで、しかと御あづけ申しましたぞ」

「はい、はい、何かは存ぞんじませぬが、娘むすめの身みからでなく御屋敷おやしよの御都合ごつごふし次第だいと御坐ござりますれば、はい、このまゝ御沙汰ごさたのあるまで確しかと親おやの手許てもとに止とめて置おきまする、さて／＼長々ながくの御恩ごおん、せめて五節句ごせつぐだけでも御禮おんらいかた／＼伺うかがいはでは濟すまぬ筈はずのところ、何をいふにも老耄おいまれた見苦みぐるしい船頭風情せんとうふうせい、第一だいは御威光ごゑいこうに恐おそれ、また一つには、もしや娘むすめの肩身かたみが狭せまからうかと、はい、いやもう、しが

かはりもの



かはりもの

ない父を持つた子の可哀さに、これまでの御無沙汰、何卒よろしう御用人へ御傳へ下さりますやう、なう小浪、これが乃公の精一ばい、生れてから始めての挨拶ぢや、はゝゝゝ』

仲間男の立ち去りし後、老爺おもはず膝を進めて聲を潜めつゝ、眞黒の顔に眼のみ白く光らせながら

『今日の渡船で、ちらと聞いた客衆の風聞、さては眞實ぢやの、今お世取の若様が、御切腹なされたとの事』

『えゝ、父様どうしてよいやら、いッそ死んで退けうかと』

『なゝ何をいふぞい、たとひ御主人が御切腹なされようとも、そりやア歴々の御身分柄で、なされずは済まぬ理由あつての事ぢや、それを我等風情の娘が、

男でもあることか、女の身で、えゝ、しゝ死んで堪るものか』

『いへゝ父様、男でなうても、またどれほど外に女中があつても、妾だけは生きて居られぬ理由』

『何ぢや、和女ばかりが生きて居られぬ理由とは』

『あい、その理由がある故、かうして退りましたは、現世の御暇乞に』

『やア、いよゝゝえら事ぢや、武家奉公も善し悪し、いつの間に其の、そのやうな仔細らしい、かゝ賢過ぎた剛氣になつたのぢや』

橋場の渡頭小屋に四五人の船頭うち寄りての物語、いづれ四邊かまはぬ大口からゝと高笑ひしながら、

かはりもの

かはりもの

「さア、開闢以來の珍事出来ぢや、近來あの鳥居前の彌助老爺が家へ来た生辨天、天降りか湧いて出たか年は十七八、九でもあらうが、一目ちらと垣根越に拜んで事い、うかく、眞正面に近寄ッては氣が遠くなる、もし優しい言葉でもかけられたら生命が危いとの噂ぢや、じたい正體が分らぬ、隅田川の主が化けて出たるぢやあるまいか」

「いや二年三年この方の橋場住居では知るまいが、ありや彌助老爺が自慢の一人娘、今に始まつたことかい、七歳八歳から世間の噂に上つた蒼の名物、あの老爺がための福の神、いや大金で賣れの、買人が競り合ふのと、近所の我等まで掛合に引き出され口入に頼まれて、それはく、喧しい十三の春、ある歴々の武家から懇望せられたやらで、小姓づとめに上つた時は、老爺め、うまいこと

しをツた、田地を持つか倉庫でも建てるかとの評判ほどでもない、ヤツぱり今まで變らぬ船頭が不思議の一つで、仔細を聞けど何とも吐さず、さて數へて見れば、なるほど十八か九ぢや、侍女ならば今が盛りの眞最中を、どうして俄に立ち戻つたやら」

「は、ムムムあの妙齡で、あの美貌ぢやもの、別に考へるほどの仔細あるものか、不義は御家の御法度から、居るに居られず、遁けて歸つたか追ひ出されたか、いづれ戀の重荷の運び損ひ」

「さアさうなれば猶更ら以て相手の奴の面が見たい、そツと人しれぬ親里へ隠して置いて、戀の闇路に忍び来る垣根越、お逢ひたかつたと手に手を取り交す色白の青侍、得てある奴ぢや、見附け次第に叩きのめして、隅田川の水でも

かはりもの

かはりもの

喰はさうではないか」

「いや、せくまいく、お屋敷で忍び逢うた相手の色男は紋切形の御手討、泣いても喚いても返らねば、せめて其の面影に似た人の、此邊ら四邊にありはせぬかといふ娘心の一念で、油断すなよ、いつ何時、我等の仲間へ御慈悲の降らうも知れぬぞ、さアさうなれば差當つて誰ぢや、まづ乃公さまか」

「白癡め、その面では逆もの事といへば、いや戀は思案の外、男は氣で持つな」と人間らしう吐さうが、外でも内でも安心せい、まづ當分は太平無事、とかく女難のない御面相ぢや、はゝゝゝゝ」

折しも彌助老爺が夕潮の一流れを漁らむとや、手網を提げて小屋の前を通りかゝりしが、同じ船頭の打ち寄れるを見返りながら、

「やア皆の衆、きのふ今日の炎暑で俄に溺り込み、こゝ四五日は渡船にも出られぬ、あゝ年は取りたくないもの、羨ましいは若い身空ぢや」

「いや、羨ましいとは此方のこと、きけば近ごろ娘が戻つて居るさうな、宿這人が鞆取前か出養生か、何とでも早う身の振方を附けてくれ、いつまであのまゝ置かれては土地の迷惑、若い男の氣が狂うて渡世の邪魔ぢや、あたッ腹の立つ容姿も容姿、世間尋常に産めばよいものを、あんまり出来すぎて怨恨の種あの、娘を手許に置くからは、闇の夜の用心が専一、うか／＼すると打ち殺されるぞ」

「はゝゝゝゝかれこれ人にはれるほどの娘を持つても、子は男に限る、まして我等の渡世では晝に描いた京女郎、何の役に立たうぞ、もしあれが男ならと

かはりもの

かはりもの

をりく叶はぬ愚癡ばかりぢや、はゝゝゝゝ」  
 どりや夕陽前の集雑魚を一網せむとて、そのまゝ渡頭を過ぎて川岸傳ひの前方より、富士形の葦笠に面を包んで替草履の下郎めしつれたる武士一人、行き違ひながら俄に呼び止めて、

「この邊に、渡場の渡し舟を渡世にいたす彌助といふものある筈、その住居は何所ぢや」

「はい、その彌助めは、この老爺で御坐りますれど、何の御用で、誰方様」

「これはく、よいところで出逢うた、勝手ながら住家まで案内たのむ、委細は娘御に逢うての事」

かはりもの

みればたゞ一跨ぎの細き流水なれども、名所の跡とて大川、夕潮に押されつゝ、低き草庭に垣根越の越水を思ひ川ときけば、何とやら今の我身に怨めしく、そこはかとなう繁れる脊門の邊に夜な夜な叩く水鶏はあれども、かなしや絶えて現世に訪ひ来る人もなしと、暮れ行く空を眺めて獨り涙に濕り勝なる夕まぐれ、今しも出で行きし父の俄に歸りきて、これくゝの武家衆を伴ひしとぞいひぬ、ほどもなく入り來りて、かぶれる葦笠を脱ぎつゝ、たゞ一目に限なき淺間の住居なれば、ちらと姿を見て、そのまゝ庭より縁先に歩みくるを、娘の小浪が何心なく振り返れば、おもひきや主なり戀なりし其人の最後に、暫時の給仕せよとて我身を人しれず招き給ひし恩人、松平伊豆守が家老の田原采女ぞと見るより、はや堰きくる涙を押へて羞俯きながら迎ふれば、五十前後の物馴れたる、

かはりもの

心安さ、かゝる住居に氣を置かせじとや、そのまゝ縁先に腰うちかけて微笑を含みつゝ、

「や、其後は何と暮しておぢやる、高島殿を退られたと聞いて、なほさら心淋しからうと存じ、幸ひ今日は淺草の觀世音へ參詣の路草に訪ひまるつた、さても其氣で見る故か、何とやら面さしの細りし體、いや道理、夏瘦ばかりでもあるまい、察し入る、察し入る」

誰ひとり訪ふ人もなき朝夕は、そつと思ひの種の袖しほりて心に泣けど、まのあたり優しう慰められては、今更に悲しさの彌増して、絶え入るばかりに泣き沈みつゝ、

「つりあはぬ賤しい身が、何として勿體ない、末の末まで、いづれ斯うした悲

しさは覺悟なれど、せめて、餘所ながら、いく久しう、御繁昌の影をも見ましたいが一念で御座りましたに、あゝした悲しい御別れをせうぞとは」

「なるほど、夢にも思はれまい、されど、あれが武士の常、まして小唄にまで唄はれし伊達の左近殿、いや却つて今は生きて唄はれし振子の寛活よりも世上の取沙汰、それは先づ儲置いて、そと尋ねたいは、もしや左近殿が情の形見」  
いはれて小浪は俄に身を反けながら、はつと赤らむ顔に猶更の涙は、けに海棠の一時雨、田原采女は見るより心に首肯いて膝を進めつゝ、

「左近殿、最後の座に著かるゝ前、竊に拙者へいはれしは、今この場となつて恥づかしき事ながら、御邊の情誼に依つて今日まゐりし女は、このほどより我種を宿せる體、人品を見込んで態と他人の御邊に頼みまぬらすとの事、ついて

かはりもの

かはりもの

は今更ら隠すにも及ばず、さてまた高島家は左近殿の御舎弟が、そのまゝの世嗣となられて、はや家には差當つて用もないのみか、御一門の衆にも隠されしほどの事を、他人の身として頼まれたる田原采女、あはれ同じうは我子として養ひたし、もし女子なれば生涯の料を差添へて母子もろともなれど、男なれば田原の養子、天晴れ左近殿の形見に残されし骨法氣立を手鹽にかけて見たい、かつは産前の用意萬端、このまゝ此家へ運ばせむか、いづれかへ引取つて介抱せむかと、それこれの談合かたぐゝまるつたものぢや、さても短かき春の夜の夢ながら、召使はるゝ身として主も主、あれほどの主を戀に持ち、しかも、その種を宿せしとは女冥利、手柄ぞ、手柄ぞ」

扇子もて脚下より襲ひ來る蚊を打ち拂ひながら、くづるゝばかりに満面の笑を漏らして打ち語れば、破障子一重の此方なる父の彌助は、今しも澁茶汲み出して起ち掛けし膝を、じはりと卸せしまま兩眼を閉ちて腕を拱きね、はて知らなんだ、目に見えねば二月か三月か、よもや五月ではあるまい、さて今の返答を何とする、

折しも夏の夜の月は出でたり、いざや沿岸傳ひの川風に吹かれながら歸らむと、田原采女が立ち去りしを、門邊まで送り出でたる父の彌助、忽ち引返して庭前の縁に飛び上るや否、

「やア出かした、出かした、何として今まで隠しをツたぞ、相手が相手で、生きて御坐つてさへ逆も末とけぬ縁、今となつては猶更のこと、あゝ困ツた、あ

かはりもの

かはりもの

ツたら一人娘を味な事に捨て、退けたと悔んで居た最中、妊娠とは思はぬ珠玉の拾ひものぢや、まして大名の御家老か引取って子にしてやらうとは、神様佛様、何は儲置き、身を大切にするが専一、ところで幾月目になるぞ、三月か四月か

おもはず歡喜に餘つて喚き立つれば、娘は襟に首さし入れての物思ひ、まだ乾ぬ涙の顔を振り上げながら、

「え、父様としたことが、いかに近所隣屋がないとても」

南無三寶と忽ち老の頸骨を縮めて中腰になりつゝ、しかも俄の小聲にて、

「めでたい、めでたい」

「これが何の目出たからうぞ、世の諺にいふ通り、父なし子を産むは女子の恥辱」

辱

「え、不吉な何をいふぞい、父なし子といへばいふものゝ、稟けた血筋は天下の歴々、引取って養ふ人も歴々、それを兎や角う吐す奴があつたら、第一この老爺が承知せぬ、堪忍せぬ」

「いへ、父様、その父御が人も知つた歴々だけに、賤しい母の胎内を借りた御子様がおいとしい、それも御家の跡でも取れる御身分ならば、妾は其のまゝ身を避けて陰ながら御成長を祈りもし、また楽しみもせうなれど、なまなか血筋でもない他人の情誼に養ひ取られては」

「さ、その養ひ人もあれほどの御人品」

「どれほどの御方でも嫌、いやな事いやな事、十八の今日より生涯このまゝの

かはりもの

かはりもの

獨身に、せめての御形見は唯こればかり、たとひ公方様の仰せなりとて手放す氣はさら／＼、まして御武家は禁物々々、大の禁物、お悼はしや二十歳に足らぬ十九の夢を一期としての御最後も、歴々の御武家にお生れ遊ばしたが原因、もしまた生れる御子様が男でもあれば猶更、父御の御氣性をうけついで、どのやうな心剛い御方にならうも知れぬものを、怖や／＼、世にない父御には申譯も立たず、世にある方の情誼も無にするやうなれど、賤しい身に宿つたが御不運、そつと此のまゝ産み落して何にもいはず、ゆく／＼は無事な町人にでも育てたいが山々、父様も亦いかに出世なさらうとも、船頭の身で武家の歴々を初孫に持つて何となされる、それよりは朝夕の手鹽にかけて、孫よ祖父よと浮世の樂み、互の杖柱』

いひつゝ、兩眼の溜涙はらく／＼と落せば、父の彌助も思はず老の目を睨いて、

『なるほど、さういへば道理ぢや、身に過ぎた不相應の孫では、折角の祖父となる甲斐もないこと』

『それ／＼そこに氣がつけば妾も安堵、もし娠妊でさへなくば、船頭の娘でも十三の春から歴々の武家に勤めた小浪、まして、しのぶ戀路の人にもいはれぬお情のかゝりしもの、あの方様お一人を先だて、何とせうぞ、をめ／＼お後に生き残る心ではなけれども、かうした忘れ形見があるばかりで、俄の臆病、ほんに氣が弱うなりました』

『も、道理ぢや、この通りぢや、よし、さらば一番、死ぬまで、老の脛腰を踏ん張つて、たとひ世間の人並に暮せずとも、母子二人は飢ゑもさすまい凍えもさ

かはりもの



かはりもの

すまい、安心して玉のやうな男の子を産んでくれ、いやもう浅草の観音様が歩いて御坐つて子に欲しいといはれても、いつかな金輪際、やるものか」

「いや、父様、お年よられた身體、無理な事せずとも、三人五人の生涯は安樂に送るだけの用意は」

「ある、あるとは何處に、どうして」

「家は先づ太平の世の末代まで續けど、武士の身は一世一代、何時いかなる事に果てるやら、まして世に唄はるゝ高島左近、萬一の後にて、人に指さるゝな、とかく浮世に先立つものはこれぢやとて、そもやお情を蒙りし時より小判で百兩、姪娘と知れてからは男女いづれにせよ、これが父子の證據とて、洛陽名物粟田口の差添一口」

「えッ、小判で百兩ぢや」

「お手づからの封も解かず其のまゝ、あの葛籠の底に」

「嗚呼お目にかゝつた事はなけれど、さて、御立派な方ぢや、年にも似合はぬ、行届いた思召、なるほど世上の小唄にまで唄はれたはその筈、いよゝさう聞く上は、今日から船頭やめて、天晴れ無事の安産祈禱、父御に似ました玉の男の御子様をお授け下さるやう、この老爺が一念で、浅草の観音様へ百度づつの日參せうわい」

「ほゝゝゝ父様、その観音様が歩いて御坐つても子にやらぬとの口の下から、またその観音様へお頼み申すとは」

「えゝ子にはやらぬが、お賽銭あけて安産だけを祈るのぢや、はゝゝゝ」

かはりもの

あれほどの名物が最後の際に頼みし一言、しかも他人の我には猶更ら重し、されば生るゝ忘れ形見を子にせむとて、その後も絶えず物を運びて訪ひ來る田原采女が義侠は、しみぐと身に餘りて嬉しけれど、父子が胸裡には言ふに言はれぬ仔細の辛さ切なさ、かゝる人の情を後々までも欺かむは罪深き業、せめては今のうちに打ち明さむとて、小浪が涙ながらの筆硯、こまぐと認めたる書狀を父に持たせて田原が屋敷に投げ込ませつゝ、そのまゝ俄に取片附けて家をうつしぬ、

もとの橋場より見渡せば隅田川たゞ一重を隔てしのみなれど、もとより遁け隠れするにもあらず、身にあまる人の情の辛くて心ばかりの申譯に立ち退きし假の宿、關屋の里の片邊りに此の村の手習師匠せし浪人が住跡とや、杉垣を廣く

245

結び廻して厨とりませ五間といふ、浮世を忍ぶ父子たゞ二人には過たれど大切の産婦、うまれし産聲は土風の吹き入るも嫌なりとて、こゝに移り住みぬ、庵崎のすみだ河原に日は暮れぬ關屋の里に宿やからまし、こゝもまた同じ流れの名所とて、内川の綾瀬川、丹頂の池、鐘が淵、近くは物の本にある梅若の古跡、はるぐと京都より我子の行方を尋ね佗びつゝ東の空に逍遙ひ來し甲斐もなう、はや亡せし兒が餘波の塚に身を抛けて狂ひしとやら、昨日まで住みし垣根の水を思ひ川といふさへ何となう身につまされて悲しきに、今また其事にはあらねど子ゆゑに迷ふ同じ哀れの深さ辛さよ、さらぬも空に一聲、杜鵑の名所なり、夜ふけて枕に通ふ蟲の音の名所とは、どこまで憂きに伴ふ我身ぞと、過越方また行末の事など案じ煩ひながら、いつしかの岩田帯、かくせど今は餘

かはりもの

所の目に立つ六月とはなりぬ、

父の彌助は舟も楫も人と譲りて、船頭さらりと止め、片手間の樂み半分に馴れし漁網さへ引き破りて生涯の殺生を思ひきり、朝夕ただ淺草の觀世音に日參の百度詣で、ひたすら娘の安産と男兒出生を祈りつゝ、寸暇あれば春門の畑に鋤とツての土三昧、おのが身の老を忘れて立働さぬ、

はや今日も暮るゝに程なしと、何心なく門邊の方を眺むれば、見馴れぬ夕陽の影法師、ぬツと入り來りしは年ごろ三十前後の若男、色まツ黒に肥え太りて片肌脱ぎに裾をからけたる大模様といひ毛皮の腰巾著といひ、すき間なき胴金入の長脇差、剃り上げし額際の向疵、うす赤く光りて夜の梟に似たる眞丸の目玉と鳶鼻との間に物凄き小皺を寄せながら、にやりくと笑うて會釋もなく、

「これ老爺、ちと物いひに來た」

風俗といひ面魂といひ、言葉の端々より身の進退まで、世にいふ斧鉞とて、上に向うてこそ切味なけれど弱身に附け込む下に向うては必ず押し切り叩き切る大あぶれ者、うかく穴を探られては叶はじと、彌助なほさら慇懃に笑を浮べて老の腰を屈めながら、

「これはく何方様かは存じませぬが、この老爺に御用とは」

いふ顔ぢろりと睨み下して無遠慮に腰うちかけ、片脚折ツて其の足首を片手に掴みながらの澁り聲、

「外でもない、おぬしの娘に逢ひに來た、きけば妊娠さうなが、ありや詣の兄ぢや、ついでに連れ添ふ男にも出逢ひたい、この乃公は、鎮守の八幡様と共に

かはりもの

かはりもの

葛西一面かけて人に知られた若宮村の権藏、みる通り色が黒うて身體が大きくて、どこの隅でも中央でも腕力自慢の敵がない故、は、は、は、何奴が吐し始めたやら、黒牛の権藏と呼ぶるゝ男ぢや」

いひつゝ、四邊じろく、斜めに首を捻エて奥の方を差覗きし體、草叢より鎌首たてし毒蛇の物を覗ふが如し、

若宮村に構へたる黒牛の権藏とて、四邊かまはぬ横紙やぶりの大あぶれ者、娘に逢はう妊娠は誰の兒ぢや、その男にも出逢うて物いひたいと喚く體に、父の彌助、いよゝゝ驚き呆れて顔色を失ひつゝ、たゞろく、腰を屈めて盥茶汲み出す手許さへ打ち震へば、ますゝ附け入ッて圖に乗る大口からくゝと高

く笑ひながら」

「人の風聞に聞いたばかりか、昨日の晝ごろ脊門の隙間から、しみぐゝ覗いた縁端の立姿、なるほど、こゝらの片田舎には仔細なうて住む筈のない名玉ぢやしかも男なしの妊娠とは猶更ら以て深い理由のある筈、ついでに餘所の事でも捨て置かれぬ深切氣に生れた黒牛の権藏、その仔細と理由とを聞きに來たのぢや」

「いやもう、御深切に、依頼ない父子たゞ二人と思召して、わざゝお尋ね下されまする段々、ありがたうは御坐りますれど」

「その仔細いはれぬとか、この乃公に」

「いや何と致しまして、眞實のところ、いふほどの理由も仔細も御坐りませぬ

かはりもの

たゞ去年の春、さる町家へ嫁に遣はしました程もなく、その男が世を去りまして、あとに取残された俄後家」

「むゝなるほど、嫁入先方の男が腹の中へ土産を置いて死んだのぢやな、儲さう聞く上、猶更ら幸ひ、乃公も去年の秋、三年このかた連れ添うた女房に別れて今は獨身、お互に何所から點の打ち人もない同士、なんと、改めて嫁に呉れまいか、但し婚に這入らうか、もしさう極れば善は急げの世諺、べんぐくと氣長う産月を待つて死んだ奴の厄介種を垂り出すより、たつた一服の墮胎藥で濟む事ぢや、えゝ孫の面が見たけりや何の雜作もない、すぐまた仕込んでやらうわい、はゝゝゝ舅どの、憚りながら茶を汲み直してくれ」

あくまで傍若無人の毒を吐いて、あらたに汲み直せし澁茶を飲みつゝ、果は其

まゝ這ひ上りての大胡坐をりく、四邊みまはしながらの笑を含める面憎さ、畜類め外道め、せめて今こゝに十年も若ければ、我も昔は男一疋、隅田川に艦柄を握つて誰に劣らぬ腕節脛節、かゝる奴に物いはすべき筈なく、もし叶はずば引き摺り出して水中の早業、しめ殺して底の藻屑とするも易けれど、何とせむ嗚呼この老年の衰弱、まして今は大事の娘が大切の妊娠ごと、無念の腸をしほり涙を飲ながら、平蜘蛛の如く身を伏つつ、額越に拜まむばかりの彌助老爺、

「何をいうても只今は、しかと御返事のしようもないこと、いづれ、そのうちあらためて此方より、御宿許まで伺ひました上」

「なるほど、今こゝでこそ他人なれど、うんとさへ一言いへば、忽ち其日から父子夫婦となる間柄、あんまり押し詰めて手荒い事も異なるものぢや、さらば静

かはりもの

肅に歸つて返事を待つとせう、

「いつごろ来る、若宮村の黒牛といへば盲目でも知れる筈、うかく空待ちさして後悔するなよ」

「はい、はい、必ず四五日のうちに」

「おツと待て、その四五日は聞く耳ないぞ、おそくとも、翌日中」

「せめて二日の、御猶豫を」

「え、この日の永いに二日とは、なれど一歩このまゝ退いて二日にせうわ、しかと約束したぞ、老耄の空耳走らすなよ」

「はい、はい」

のそくと肩を怒らし大手を振つて立ち出でしが、また俄に引き返して門口よ

り鬼に等しき首さし入れつゝ、

「老爺々々、もし萬々一、縁談が不承知ならば不承知だけのこと、して來ずば身の爲になるまいぞ、はゝゝゝこれほど念を入れて置く黒牛の權藏に、なま青い返事するなよ、はゝゝゝ」

かはりもの

橋場に居りし頃は優しき人の情の身に餘りて苦しみ、今この關屋の里では毒蛇に等しき男に覘はれて苦しむ、また介抱手厚く生みし子を養はむとの芳志、腹の皮を引き裂いても掴み出さうとの悪業、よしある歴々の慈悲と名もなき下司の無残と、おもへば廣き浮世に、たゞこの川一重を隔てゝの地獄極樂、怖ろしや隣屋に鬼が住むか佛が住むか、

かはりもの

秋とはいへど残んの暑さに堪へ難ければ、夕暮を待ち兼ねて軒端そよく吹き来る風を樂しむ頃ながら、今宵にかぎりて早くより裏と表を閉て切りつゝ、燈火を隔てゝ父子たゞ二人の對坐、はや臉邊に宿る露雫、

「父様、えゝ何とせう」

「されば、若宮村で黒牛の權藏といふ奴、見たは今日が始めてなれど、對岸でも四五年以來、うすく名は聞き及ぶ大あぶれ者、見込まれたが時の災難ぢや、酒と肴に小判の二三枚、無念ながら添へてやらすば、なるまい」

「その、その小判よりも何よりも、あのやうな畜類に劣つた下司風情が口の端にかけられて、思ひもよらぬ横戀暴の押掛け業、そののみか、死んだ奴の厄介種といはれたが口惜しい、たつた一服の墮胎藥で濟む事とは、何として御墓に

申譯が立たうぞ、いやしい胎内に宿つて在せばこそ、かゝる奴の毒口にもかゝれ、もしや、もしや、父御が現世に御坐らば、黒牛とやら白牛とやら、たゞの一言でも物いはさうか、えゝ思へば思へば八裂きに引き裂いて、飽き足らぬ奴、嫁に呉れぬか婚に這入らうかと聞いた時、父様、妾は耳を塞いで疊に喰ひ附いたまゝ、口惜しさに取上氣せて目が舞ふかと」

「いや、乃公とても同じ事、せめて、今こゝに十年も若くばと、腸が湧き返つて皮肉が鳴つたれど、あゝ老年ぢやわい、その上に和女が大切の身といひ、じつと喰ひしぼつて彼奴が脚下から出た時の無念心外」

「あのやうな奴、一といへば二、二といへば三、強慾非道には程度のないこと、いつまで附き纏はれて苦しきまうよりは、今夜のうち、父様、そつと此家を」

かはりもの

かほりもの

「なるほど、世帯道具に目さへ呉れずば、例の物を肌につけて立ち退くは易いが、いや／＼あれほどの悪黨、どこに何うして網を張らうも知れぬ、まして大切の身ぢや、なまなか遁け出して人もない夜路で萬一の事あつては、それこそ取返しがならぬ、猶更ら御墓へ對して濱まぬ理由、こゝは乃公がいふ通り、一まづ涙を呑んで約束の日限に音物くれてやるが上策、非道な奴ほど眼前の利慾に迷ふものぢや、よし立ち退くにしても、今日や明日では却つて仕損じの基、兎も角も彼奴に一油断さしてからの事、いづれ長居は無用の土地、さりとて今更ら元の橋場に歸られもせず、長の星霜を同じ流れの櫓棹で暮し合つた渡船の奴等七八人に打ち明けて談合すりや、流石に馴染甲斐、また何とか寄り集つて工夫の道もあらうが、これとても妻子眷族あるでなし根が丸裸の河原生育、今

までの彌助老爺が獨身でこそ濟め、人の目に立つ娘を引き連れた今の彌助では、うかと恩にも着られぬ理由、あの橋場に立ち退いたも、實に田原様ばかりの故でない、第一は顔知合の此奴等が和女を見ての批判取沙汰、がや／＼と喧しう、うるさいからの事」

「あゝ何として妾は、かうも不幸に生れたやら」

「不幸か幸福か、人の行末と水の流れは知れぬで持つた浮世ぢや、それよりは差當つて明日の事、まづ今夜は此のまゝ、寢ながら猶も一工夫せうわい、なむ觀世音菩薩」

若宮の若宮八幡宮の鳥居前を過ぎて、一町あまりの藪壘に添ひつつ行けば、見

かほりもの



かはりもの

上ぐるばかりなる椎の樹の蔭に立てる石地藏に對うて、表の廂に葎かけたる家こそ黒牛が住居とぞいふ、さてもさても佛の前に鬼が住む世の中、なほさら油断ならじと思ひながら、進まぬ氣を取り直して門口より差覗けば、何をするやら、何れも一癖ありけな荒男三人が、大胡坐のまゝ肱枕に頬杖しながら、がやぐと高笑ひしぬ、

彌動老爺いと慇懃に腰うち屈めながら、  
「はい、ちと伺びますが、權藏様の御住居は當家で御座りますか、昨日お約束申した關屋の老爺が來たと、お取次を願ひます」

大きくより三人、等しく此方を振り返りて、互に目と目を見合せながら、大胡坐の一人、

關屋の老爺殿か、それならば取次ぐに及ばぬ、今朝から兄品が待ち受けて居る折柄ぢや、すつと、そのまゝく」

いはるゝまゝ打ち通りし一室は、庭前の竹垣を隙間なく嚴しう結び廻らして、隅々までも葎席を敷き詰めたる體、さながら人を捕へて押し籠め置くが如く、此方の壁には手槍、棍棒、脇差を懸け連ねて、傳へ聞く山賊の棲家に似たり、折しも障子一重の彼方に大欠伸の聲、晝寢の夢ぞ覺めたりと覺しく、やがてまた何をか私語さしが、忽然さつと引き開けて現はれ出でしは黒牛の權藏、

「はゝゝゝゝどうかと思つたら約束を違へず、よう來た、昨日は異な事で、ちと酒が過ぎた酔加減に口も過ぎたであらうが、今日は酒香もない權藏ぢや、さア心置きなう、うち解けて談合せうわい、はゝゝゝゝ」

かはりもの

かはりもの

狼おほかみの空睡そらねの鬼おにの空笑そらわらひ、いよく薄氣味うすきみわるく心こころを配くはりて身みを縮ちぢめながら、  
 『きのふ段々だんだんと御深切ごしんせつの仰おほせを、昨夜ゆうべいちく娘むすめに申まうし聞きけましたところ、み  
 る影かげもない女をんなを、それほどまでの思召おぼしめし、さりながら纖弱かよわい性質うまれつきといひ姫みこ姫むすめとい  
 ひ、何なんとも今いま、さし當あたつて御返事ごへんじの仕しやうもない事こと、たゞその思召おぼしめしの御禮ごんれいまで  
 に、兎うさぎも角かくも父子おやこ二人ふたりが寸志すんしばかりの品しな、整ととのへてまるる筈はずなれど、生憎あいにく、思おもは  
 しき魚類さかなもなし下戸げこの身みには酒さけの善惡よしあしも分わからねば、ほんの申譯まうしわけばかりに、この  
 一封ひつづゝ』

いひつゝ懐中かみころより取り出して、おそろく膝前かみへに差置さしおけば、黒牛くろうしの權藏ごんざう、じろ  
 りと見遣みやりながら、

『なるほど、何なんといつても縁えんばかりは互あひの相性あひしやう、紙かみを合あはせて糊細工のりさいくのやうに指ゆび  
 頭の藝ぎでも行くまい、第一だいいち、無理むりに押し付けては興きようが薄うすうて面白おもしろくない、はゝ  
 ゝゝとところで折角せつかくの一包ひとづつ、今更いまさら、つツ返かへしもなるまい』  
 いひつゝ、わざと封紙つづかみの端はしを指先ゆびさきに抓つかんで引き上あぐれば、小判こはんの重量おもみに紙かみの折  
 目を脱ぬけ出いでて三枚まい、ちやらくと落おちしを、權藏ごんざうじツと見詰みづめながら、  
 『むゝ三枚』

『それが眞實まこと、心こころのありたけ、工夫くふうの及およぶだけ』  
 『いや、同じ事おななら、せめて四十か五十枚』  
 『えゝ、何なんと致いたしまして、そのやうな大金たいきんが』  
 『ないとは言いはさぬ、この黒牛くろうしが心こころの鍬くわに鼻膏はなごうを曳ひいて靨ねじうた金的きんてき、とても  
 事ことぢや、觀念くわんねんして出だせ』

かはりもの

かはりもの

「父子たゞ二人が、やうく其日暮らしの境涯に」

「はゝゝゝゝ、其日暮らしの境涯なら、錢金とりまぜて端數のあるべき筈を、耳を揃へた小判三枚とは、ちと出来過ぎた、しかも産聲あけてから一度も人手にかゝらぬ清淨無垢の金色、あらたに封印きつた上層の三枚と見たは癖目かまだある筈ぢや、第一が、ちらと覗いた娘の衣裳風俗、あれが其日暮らしの老爺が子かい、白痴め、いづれ世に隠れて人目を忍んだ面白い仔細、それを其のまゝ何ともいはず、しらす顔の辛抱代に五十枚とは價廉いものぢや、うろく狼狽へて痛い目をせぬうち、おもひ切つて早いが身のため、あの娘が大事なら猶更の事」

黒牛の權藏、そろく隠せし心の角を現はして、肩を怒らし身を斜に眼を据ゑて睨みしが、差俯いたるまゝ更に答へぬ彌助の體に、權藏おもはず振り返つての大聲、

「やア誰か来い、ちと荒仕事ぢや」

瓜の蔓には瓜、草は土に根を持つもの、いやしき身にて果つべきを、なまなか武家の奥奉公、それさへ分に過ぎしとは思はで、我ながら怖ろしや戀は曲者いつしか春の夜の朧月に、うつゝか夢か人目のびし嬉しさも、さめて今更の悲歎を誰に語らむよしもなく、たゞ徒らに身一個を持て餘したる今日この頃、もしや妊娠でさへなくば何より易い死出の旅路のあるものを、冥加に餘りし忘れ形見は我を得しらぬ罪の報いか、かくまでの憂苦勞、はて何とせう、

かはりもの

かはりもの

うき世の橋場、もの思ひ川、やうく立ち退けば心の關屋、人しれぬ胸の内川、見られて苦しき庵崎の名さへ我が身の憂きを重ぬるか、はや今日の日脚いつしか傾いて春門の樹立に秋蟬の聲々せはしう、暮るゝに程なき軒端を見上げながら神さま佛さま、あはれ一人の父が身の上、無事に守らせ給へと専念の眼前を、ぼつと夕陽に映る鳥の羽影、諺にいふ人の訪ひ来る前兆とやら、さては今にも歸るかと思ふ事頼みつゝ、垣根越に伴ひ上り伸び上り遙の畦路を見渡せども、そよぐ稲田に哀れを添へて案山子の外に人もなし、黒牛とは其名に等しき畜生の角端、もしや父が身に觸りて怪我しはせぬか、立出でしは晝ごろ、半里あるや無しやの若宮村へ今日の今ごろまでは何としてぞかくと知らば、遣るまじきに、これほどの物思ひしながら見にも行かれぬ此身

の辛さ悲しさ、いつまで泣いて待つとも詮なし、せめては馴染なくとも村内の人を頼みて迎ひに立てむと、葛籠の底より小判一枚いづこの里も是沙汰と、そのまゝ携へて門口を出づれば、ぼつと暮れかゝる黄昏時に足音もなく歸り來りし彌助、一目みるより我を忘れて、

『おゝ父様か、何として此やうに』

『遅うなつた理由がある、なれど先づ無事に戻つた、さぞ待つたであらう』

『そのまゝ家内に入り燈火かきたてつゝ、しみじみ見れば父が顔色、何とやら青ざめて打ち凋れたるのみか、や、禿けたる老の額口より左の頬にかけて引き摺られたる擦痕といひ、残んの白髪もうち亂れて元結の切れたる體に、ハツと驚いて涙の小膝を進めながら、

かはりもの

かはりもの

「これ父様、その疵は」

「いや外でもない、あまり歸りの遅い田圃路で心せくまゝ、つい小石に躓いた顛倒疵ぢや、それは儲置き、小浪、もはや叶はぬ絶對絶命、どうでも今夜のうち此所を立退く用意」

「いづれ、いづれ、さうとは昨日よりの覺悟なれど、思へば思へば、あるにあらぬ口惜しさ無念さ、せめて眞實の鬼か蛇にでも追はるゝことか、同じ人間の皮を着た、あのやうな奴に責められて」

「そゝその、その無念と怨恨をいへば、咽喉笛に喰ひついても飽き足らぬ奴なれど、これが浮世の災難といふもの、しかも昨日よりは今日、また今日よりは明日と、彼奴どのやうな無理難題を持ち掛けるやら、強慾非道に底のない悪人

を相手として、このうへ大切の和女が身に萬一の怪我あつては猶更の事、まだしも今までの無事を手柄に、それも夜深は却つて失策の基ぢや、今夜の明方、ほのくゝと東の白む頃に」

「こゝを立退いて父様、どこを目的に」

「どこといふ目的はなけれど、あれだけの小判があれば工夫もある、なまなか人目と姪姫の保養を思うて町に離れた田舎に住んだが過誤ぢや、この上は屋の棟つゞいた市中のこと、さア今のうち、そろゝと用意せい、金は念のため兩分に割いて二人が胴巻、我等風情の身には恐れながら、記念の御脇差は乃公が腰、ついでに、その葛籠を脊負うて餘った一包は片手に提げて行かう、なるべく和女は身輕に引き占めて、朝露にかゝらぬやう草履に紐をつけ、躓かぬ用意

かはりもの

かはりもの

もせずばなるまい、観世音の御札、ありや胸帯の間に入れて、かゝる時は猶更  
 憂いも辛いも川堤、半里あまりのところぢや、浅草まで行けば駕もあり、夜も  
 明けて人の往來もあるぢや」

「え、父様、お年よられたに妾のやうな女を持つて、いかい御苦勞させまする」  
 「な、何をいふぞい、これが父子ぢや」

東雲の横雲に刷いたる薄紫の色やうく、白みかゝりて、まだ曉の鐘も聞えず、  
 前路を急ぐ旅鴉さへ墾放れぬ夢のうち、見上ぐる空には殘んの星影なほ燦きな  
 がら、樹下闇に露ふかき蟲の聲々啼き渡る、その關屋の里より隅田川の堤を傳  
 うて父子たゞ二人、父は葛籠を脊負うて先に立ち、娘は裾をかゝけて後になり

つゝ、氣も心も急いたるまゝに物さへ得いはず、平生は目に馴れし流るゝ水の  
 音まで物凄く、さつと朝風に戦ぐ汀の葦にも人や追ひ來るかと思はれ、斜めに  
 出でたる枯木の幹にも打ち驚いて立ち止りぬ、

心に急ぐほど歩の撈らで、氣のみ先だつ身をあせりつゝ、やうやう寺島の里、  
 白髯の森をも打ち過ぎしころ、ほつと一息ついて前後を見渡せば、まだ明け放  
 れねど何とやら白み渡りし一筋道に動ける物の影もなし、

やれ嬉しや、こゝまでが瀬戸際、いざこゝよりは一文字の土堤を次第々々に曉  
 け行く空と、互に心を勵ましながら二町あまりも行きしころ、道を埋めて茂れ  
 る葦の中より三人の大男、ぬつと現はれて立塞がりぬ、

「やア關屋の老爺、おもひの外に待ち兼ねた、待ち兼ねた」

かはりもの

かはりもの

南無三寶、はつと今更に驚きながら、もはや叶はぬ絶對絶命、娘を背後に圍うて脊負ひし葛籠を其のまゝ控と投げ卸しぬ、

「えゝ執念ぶかい、どこまで附き纏ふのぢや、こなた衆も男でないが、揃ひも揃うて、それほど立派な體格を持ちながら、わづか取るにも足らぬ女子一人と吹けば飛ぶやうな老人に、わざ／＼夜を込めての網を強るとは、腕が餘つて度胸が氣の毒、同じ悪人でも目が低うて御苦勞すぎた事」

「はゝゝゝゝゝこれ老爺、見込まれたが因果、あるだけの金を奉つた後での文句、ゆる／＼思ふ存分に吐け、きけば妍娠の娘、ちとお荷物ながら厄介ついでぢや、それも其のまゝ受取つて遣らうわ」

「昨日、あれほどの目に逢うても、無いものは無いが眞度、父子たゞ二人の身

代は此の葛籠、あきらめて遣りませうが、もし萬一、圖に乗つて娘にかゝらば最後、もう破れかぶれの死者狂ひ、黒牛めの居らぬが不足なれど、昔とツた櫓柄の腕の一物」

「はゝゝゝゝゝ老爺め味を吐すぞ、さアかゝれ踏み潰して取れ」

三人もろとも大肌ぬいで足踏み鳴らしつゝ、小鳥を規ふ鷲の如くに躍りかゝれば、最早これまで五十九年を一期の夢、うき世の退際、無念の暗際、羞いたれど死身の猛勢、神も佛も入るものか子を思ふ親の一念、おのれと叫びざま娘を圍うて老の眼を怒らしつゝ、すつと抜けば朝ほらけの薄闇を破つて高島左近が家重代に傳はりし粟田口國綱、氷に似たり

「さア來い」

かはりもの

かはりもの

父が一牛懸命の背後には娘の、小浪、大木の幹に身を摺り寄せて總身に汗を流しつゝ、今をかぎりとの心の唱名念物、あはれ武夫の魂魄ときく白刃に性あらば父が身を守らせ給へ、残せし忘れ形見を思召さば此身を守らせ給へ、父子二人のものが生命の瀬戸際とぞ念じぬ、

娘は一擲み、老筆は一蹴りと思ひの外、残んの白髪を逆立てたる眼を怒らして死者狂ひの白刃、ぴかりと目鼻の間だに閃けば、さすがの、悪黨ながらも無腰の素肌、しかも今は老爺め遁けむとはせず、さア來いと叫びし皺枯聲の物凄さに、はッ和我を忘れて飛び退く隙を、得たりと娘の手を取るや否、夢うつゝに驅け出せば、今更ら思ひきつて疾風の如くに追ひ来る三人の奴原、しかも中には得物を拾うて携へたる體に、もはや叶はぬところと振り返つて前に進みし一

人の眞向、業は知らねど懸命の白刃に寸隙もあらせず、さつと立ちし血煙に驚く隙を又もや得たりと遁け出せしが、あゝ何とせむ、尋常ならぬ身の娘が足もと、淺草までは逆もの事と、おもはず見下す隅田川に一艘の苦舟は天の賜物、前夜の漁火なほ消えやらで流水にうつれる火影を目的に、死なば諸共こゝぞ捨てての浮ぶ瀬、土の上より得たる業なり、しかも追ひ来る奴は二間あまりの足音に、はや片袖を掴まれむかと思ふ一刹那、娘を小脇に搔い込んで堤の上より一足飛び、さつと立つ水煙に寢惚けし白鷺一羽、ばたくと驚いて飛び出しぬ、

夏の未より秋の初旬にかけての夜の漁遊は、好める身に取つて一刻千金の春にも代へ難き娛樂、笛の露いとど濕やかに川風いつしか肌に染みて更け渡る初夜

かはりもの



かはりもの

の鐘より東の空ほのくくと曉け行く頃まで、水に砕くる漁火の影に潛みながら、さつと打ち下す網の目に星をうけたる鱗の光輝きらりと閃く時は、一瞬の價値、十千萬兩、

船頭一人に客は三十一二の武士一人、いつよりも今夜は思ひの外の獵物に、我を忘れて明けゆく空の今一朝と、みづから手網を提げながら舳に立ちし折しも忽ち聞ゆる水音、はつと見返れば水煙の餘波、たしかに土堤より人の飛び込みしと覺しく、やがて我舟を目掛けて泳ぎくる體、みるより武士は網投げ棄て、船頭もろとも、何者にせよ助けやらむと漕ぎ出すを、彼方も目早く知りてや泳ぎながらに俄の一聲

「そゝ、その舟ッ」

泳ぎくる勢ひ、漕ぎ寄する勢ひ、やう／＼近づいて見れば白髪の老爺が若き女を小脇に抱へながら、さしも慣れたる水にや、舟底に急かれて渦巻く流れを事もせず、きつと雙手を差出す船頭の擡に取り附いて舷に浮び寄りつゝ、

「この、この女たのみます、娘ぢや、父ぢや、今、いま悪者に追はれて」

きくより見るより武士は兩手を伸ばして女の襟首ぐつと攔むや否、する／＼と引き上げたるまゝ、又もや老爺を引き上げむとすれば、わざと舷にかけたる隻手を外して身を浮べながら、

「娘、たゞ一人の娘で御座ります、しかも妊娠、さほど水を吞まされぬ筈なれど可哀や氣を、きゝ氣を取り失うた、御介抱、御介抱」

「えゝ白痴め、娘は引き上げたぞ、物は後で言へ」

かはりもの

かはりもの

「いや／＼拙者は逆も加からぬ身、こゝこれ御覽下さい、堤から飛び込んだ時  
持つて居た脇差で我と我、よ／＼横腹を」

いひつゝ宛から瓢の如く、ほかりと軽く身を仰向けて水上に浮べば、さつと散  
る血汐は紅を流すかと疑はれぬ」

「やア氣を確乎に持て、疵を負うても、それほど水中自在の身、助かるぞ、助  
かるぞ、あがれ／＼」

叫びつゝ舳を走り廻つて曳き上げむとすれど、あはれ我子の助けられしに心ゆ  
るみてや、そのまゝ水にまかして流れゆくを、船頭みるより總身の力を櫓柄に  
込めて追ひしが、浮きつ沈みつ姿の現はれしは十間あまり、果は絶え入りけむ  
何處ともなく見失ひぬ、南無阿彌陀佛

よく／＼生命冥加のない者ながら、おそろしや子を思ふ親の一念、されば此の  
娘をと、流石に慣たる武士の手先に活を打ち入れて、しづかに掻き抱きつゝ消  
え残る漁火に横たへ、船頭もろとも打ち寄りて其の顔じつと見詰むれば、身に  
も餘れる長の黒髪みだれて無心に臥せる體、しばしの香魂いづこにか彷徨ふ、  
今にも息を吹き返さば一人の父をたづねて如何に歎かむ、さらぬも雪を欺く顔  
面に曉け放れゆく雲の白さをうけて、漁火に照る頬の邊り、薄紅に畫かける美  
人の眠れるが如し、

さても父は何者、いかなる娘ぞ、あはれ妊娠と聞けば猶更の事ぞと、しづかに  
胸の邊を撫で下せば、やがて絲引く如き目を次第に開けて、わづかに手足を動  
かしながら、まだ夢うつゝの心地に見廻す體、武士は差寄りて耳に口、

かはりもの

かはりもの

「氣を確乎に持て、こゝは和女を助けた舟の中ぢや、もはや怖ろしき者もないぞ、心を落付けて、身を靜にくく」

幾度か繰返して呼び立つれば、やうく我に返りしと覺しく、かすかに細き聲、

「父様は」

「父、父も無事ぢやぞ安心せい、いかなる者が追ひ來ても大丈夫、天下の直參赤井勘兵衛が助けたぞ」

天下の直參、赤井と聞くや否、忽ち半心半生の身を寢返りて、俄に張り詰めし兩眼いきくと武士の面を見上げぬ

「赤、赤井様と、仰せられまするか、赤井様と」

むかしは下總と武藏の國境なりしが、江戸繁昌に引き連れて市中より溢れ出でつゝ住む人多ければ、隅田川の流れ淺草川の末に橋を懸け渡さむとて、時しも萬治二年、普請奉行に大目附を差副へて、春の頃より東西の兩岸に小屋を建て聯ね竹矢來を取り圍ひ、水には土砂を積み込む小舟の幾百艘、陸には諸方より集りし人夫の幾千人、晝は丁々と本石を穿つ音高く更に響いて、夜は萬燈の篝火に水底の魚鱗を驚かしぬ

下總と武藏の國境なればとて、かゝらぬ前より昔の名残を其のままに兩國橋と唱へつゝ、きのふまで草叢に蟲の音きし川端も、今日は忽ち日夜の雜沓、俄に物賣る商人の聲さへ騒がしく、御用の役人より立働く人夫の出入、さては朝夕見物の老幼男女に至るまで、織るが如き小屋掛を二町あまりも隔てし路傍の

かはりもの

川岸に一枚の蓆を敷いて編笠に面を包みながら、往來の情を乞ひつゝ露命を繋ぐ母子のものあり、

母子もろとも深く面を包めば、水の流れと人の行末、いかなるものゝ成る果ぞ、つぎ／＼の衣手うすく袖袂、さては破れし裾より漏るゝ手足を見れば、いづれ宿なき歲月の日に曝され雨に打たれながら、雪よりも眞白き爪端れの尋常さ、まして子は獨更ら母に叱られつゝも馴れては物と思はず憂き身とも知らず、をり／＼笠を脱いで無心に汗を拭へる年の頃十一二、ふさ／＼と黒漆に似たる額髪を掻きあけて、玉を欺く面上に笑を含める體、しかも男の子とて斯かる境涯にも自然の骨格を備へつゝ、刷毛の跳ねたる如き眉尻、いき／＼と張り切つたる黒目勝の凜々しき、一文字に引き結びたる唇端の兩脇を、永字八法の點に

等しき笑渦の深さ、おのづから往來の人目を振り返らせ歩を停めて、惜しや勿體なや草叢の名玉とぞ囃されぬ、路頭に迷うて露の命を繋ぎながら、これほどの子を生みし母も天生さぞやと思へど、朝夕さらに笠を脱ぎしことなく、たゞ亂るる髪の襟首に纏ひし後姿といひ、たま／＼傾く夕陽に空を見上ぐる笠の中、雲に隠れし月の端の現はれし心地して、いかなる美人の憂き身ぞと得もいはれぬ風情、ものごし立振舞より見れば思へば、やう／＼三十になるや、ならずの残んの色香、青葉まじりの一入さらに床しいとて、これ亦やがて渡らむ兩國橋の風聞に等しく、近來の一名物とぞなりぬ、

されば往來の男女、いづれも目を敬て歩を停めて、振り返り／＼みれば惜しや

## かはりもの

と物の哀れも一入さらに立添ひつゝ、鳥目なけて行かぬものなきに其の中に、若黨四五人めし連れて槍一筋を立てし乗物の武士、いつしか駕を止めて見遣りながら、その歸るさには白紙に包みし小粒を抛けて遣りしが、二日ほど隔て、此の乗物の打ち通る時、またもや駕を止めて抛け出したる一捻りの慈悲に、母子もろとも大地に手をついて笠越に見送れば、をりしも彼方より行き違つて來かゝりし乗物また一挺、同じく左右の若黨を引き連れながら母子の前に立止りて、同じく紙に捻りし情の一包、ころりと抛け出して其のまゝ打ち通りぬ、さても不思議や、ぬしは違へど同じ乗物の武士が往き還りの度毎に、同じく駕を止めつゝ同じ慈悲の一捻りを抛けて打ち通る體、しかも二挺もろとも、此頃の兩國橋の普請奉行か大目附の人ならではの、逆も叶はぬ槍一筋に左右の若黨を

召し連れたる歴々の身分、さても不思議と編笠かたぶけて思案の時刻となればまたもや二挺もろとも互に行き違つて小粒を抛け出しぬ、

今日も例の母子が川岸に出でて席を膝に並べつゝ、往來の人の袖に縫らねども何とやら哀れを催す折りしも橋普請の人夫七八人、中に小頭の印をつけたる御用笠の男もろとも、いづれも争つて前に立塞がり中腰に押し合ひながら、  
 「なるほど、これが噂に高い近頃の名物、川ざらしの袖乞とは惜しいものぢや」  
 「惜しいどころか、實は欲しいが山々」  
 「いや、惜しい欲しいと言つても、現在こゝに子のあるからは、いづれ男もある筈」

## かはりもの

かはりもの

「あるにしても、その男め、いかな腰拔、妻子に袖乞さすとは無いも同然ぢや」  
 「ある無いは兎も角、これほどの拾ひものを手近に捨て、置くとは勿體ない、幸ひ揃ひも揃うた獨身の我々、どうぢや闇取で連れて歸らうか」

「いや待て、闇取は運に叶うた奴の獨占め、それよりは誰彼なしの總女房に取極めて、夜毎に變る枕の數、いはゞ金なしで遊ぶ施し女郎にして置きたい」

「や、どれもく底なしの水性に浮かれ過ぎた氣の早い奴等め、いかに手足の爪端れが美しいとて、生んだ小作の面貌がよいとて、きけば編笠を脱いだ事のない女、もし片片目輪か三つ口か鼻缺地藏の化物なら何とする、梢で赤い果實は得て腐熟のあるもの、かくすところが曲者ぢや、そこ退け、この黒牛が角端で編笠跳ね飛ばして正體あらはしてくれろぞ」

いひつゝ小頭の印つけたる四十あまりの大男、のそくと立寄つて奥州名物の埋木に似たる腕を差伸ばせば、今まで泣きの涙に身を伏したる母親が、編笠もろとも、俄に見上ぐるほどもあらせず、傍に坐せし小さき笠の中より眞白の兩手に力を込めて、大男の胸首ぐつと掴みぬ、

「や、小作、痛い目に逢ふぞよ、放せ」

「痛い目さすなら、させてみい、一人の母様ぢや」

「此奴め、踏み漬すぞ」

「踏み漬されても、こゝ放さぬ」

をりしも彼方より來かゝる例の乗物一挺、また此方より行かむとする乗物一挺、等しく諸共に駕を止めて母子が前の人立を窺ふ體、やがて隻方より若黨また等

かはりもの

かはりもの

しく驅け出せしが、うち寄つて立騒ぐ奴原を橋普請の人夫と見るや否、互に言ひ合せたるが如き俄の勢ひに、寸隙もあらせぬ大喝一聲、

「お奉行の赤井殿なるぞ」

「大目附の田原殿なるぞ」

奉行の赤井、大目附の田原とは人夫の身に取つて頭上の電燈、はつと驚いて飛上りざま、風に木葉の身を翻して遁け行く中に、今しも傍花無人の腕さし伸べて母の編笠を奪はせむとせし小頭の大男も、さすがに顔色を失ふて引かぬとすれば、眞白の両手に掴みたる子供心の一念、放さばこそ、えッ面倒なりと片足あけて蹴上ぐるや否、蹴られて倒れながら持ッたる手首に笠越の一生懸命、がツくりと喰ひつきぬ、

かはりもの

やアうぬと叫びさま、又もや蹴上げむとするとき、はや隻方より馳せ寄りし若黨の勢ひに、今は叶はじとや一散に遁け行くを、おのれと飛びあがる片袖、驚く母に掴まれながら振り切つて蝗の如く走せ出せば、さつと吹き来る川風に編笠とられて現はれし體、お伽話の桃太郎に紅粉を施したるかと思はれ、しかも雪を欺く唇端に敵の黒血を含みし物凄さ、さても行末おそろしや、今年やうく、十二の腸に、あれほどの大男を呑んで何處までも追ひ行かむとは、寸にも足らぬ小蛇の大臺を覘ふに似たり、

駕の中より、かくと見たるは大目附の田原采女、あれ止めよと叫べば、はつと答へし駕脇の若黨一人、そのまゝ走せ出して抱き止めぬ、

「これ小兒、待て」

かはりもの

「いや放せ、放せく」

「いや待てく、今遁けた奴は橋普請の小頭、後に取調べて遣はずぞ、待て、待て」

やうく横合より掻き抱くが如く手を取って駕脇に連れ来れば、近來の往來に過分の慈悲を賜はる乗物ぞと、子供心にも始めて氣のついたる慇懃さ、あはれや馴れし兩手を大地に下けたる體、田原采女、じつと見詰めながら、

「名は何と申す、顔をあけい、年は幾歳ぢや」

「はい左太郎と申します、年は十二」

「あの母の名は」

「小浪」

「む、母の名は小浪で、左太郎、左太郎、年は十二か、なるほど十二、父はあるまい」

「父様は、生まれぬ前に」

「お、生れぬ前に無い筈、落魄れて貧苦に育ちながら、流石に種ぢや、あ、肖たわ、肖たわ、さても能く肖た、そのまゝぢや」

かはりもの

辛さ悲しさ口惜しさ無念さも身一つに掻き集めたる今の憂き身を、やうく、編笠一重に包みし哀れとは知らでや、泣きの涙に乾く間もなき其の編笠を、この黒牛が角端にかけて跳ね飛ばさむとは我から名乗りし父の仇、さては橋普請の人夫に紛れ込みしか、おのれやれ關屋の里の怨恨かすく、隅田川の堤に追ひ



かはりもの

詰められ父子もろとも水に飛び込みしも此奴のため、あはれ父が其のまゝの最後も此奴の業、かなしや我身が男ならば、せめて此の子が十六七ならばと、目を閉ぢ齒を噛み占めて大地に伏したる折しもあれ、何事ぞ俄に立騒いで散り失せたる七人の人夫に、後れじとて遁け出せし父が仇を、躍りあがって一散に追ひ行く我子の勢ひ、さても怖ろしや血筋の縁に、それと知らねど祖父が敵を覘ふ孫の一念は自然に叶ふものかと驚きながらも、今年やうく十二の小腕に何とせむ、よしや追ひ付きたりとて何の甲斐かある、南無三寶、あなやと伸び上りて笠越に見渡せば、いつしか嚴めしき乗物の前に連れ行かれたる體、はつと又もや一入の驚愕、さりながら、よくく見れば此程よりの往來の情の露をうち給ひし例の駕に、やうく胸撫で下しつゝ見返る我身の背後にも、いつし

か一挺の乗物また近づいて、これも同じく此程よりの往來に情の露をうち給ひし例の駕、

我子の連れ行かれたる彼方の駕に心は残れど、我身にも近づいたる此方の駕に打ち驚いて、そのまゝ振り返りつゝ兩手をつけば、しづかに乗物の戸を引き開けて見下しながら、

『近ごろ其處に母子の袖乞、いかにも哀れに思ふぞ、見れば何とやら仔細ありけの體、じたい何者の成る果ぢや』

『はい、このほどより度々の、お情を下さりまする御駕と存じ、お言葉のほど一入に恐れ入りまする、何者の成る果とお歴々方へ申し上ぐべき氏も素性もない、腹からの賤しい母子』

かはりもの

かはりもの

「いや、そであるまい、腹からの賤しい袖乞ならば、何とて面を現はし往來の袖にも縋りて一入の哀れを乞はぬぞ、さるを、いつとても人に見られて堪へぬやら憂き身を包む常編笠、しかも母子たゞ膝を並べて無言の體」

「勿體ないこと、左様に仰せ下さりまするほど、猶更に恐れ多くて」

「なるほど、今の身の境涯に昔を祕すは道理、その筈ながら、もしや良人たるものが思はぬ最後を遂げ、父もまた非業の死を致してより數ふれば凡そ十年あまり、あの連れし子は、過ぎし昔の春や戀しき忘れ形見でないか、但し以上の來歴さらに無しといふか」

はツと思はず打ち驚いて、今まで下けし頭をあけながら、しけしけと編笠越に駕の中を見れば、南無三寶、隅田川にて我が生命を助けられし漁舟の客、しかも

かはりもの

其容は赤井勘兵衛とて、過ぎ給ひし君が敵手の赤井彌兵衛が兄御ときくや否、思は思なれど君を思へば敵の片割と、そのまゝ恩を棄てゝ遁け出せしより十二年、さても怖ろしき世の中ぞ。朝夕の神に念じて其後の宿を尋ねし父が仇も朝夕の神に祈りて逢ふまじとせし我身の恩人にも、たゞ一時の間に出逢うて、嬉しさと苦しきの兩境、こは何とせむ、いかにせむ、

されば今更ら外に詮もなければ、やうく轟く胸を押へて聲を濕せながら、

「もし、もしや萬々一、お言葉に、似寄の者と申し上れば、何となされませうぞ」  
「されば、何と思ふべき、たゞ哀れさの彌増すばかり、や、時刻がうつる、いづれ、また歸路に、ゆるくと語らう」

かはりもの

川岸に沿って建て聯ねたる橋普請の小屋掛よりも、わけて一棟高く聳えし假屋づくりは御用部屋とて、幕うち廻らしつゝ門外に飾る常武器の外、あらたに添ふる槍二筋、これを其の日の目標にして、今しも奉行と大目附の詰めたる時刻と知れば、さしも騒がしかりし持場々々の人聲さつと水を打ちたる如く、たゞ丁々と木石を穿つ音のみ、常よりは高く空に響き渡りぬ、

奉行は二人なれど、今日は赤井勘兵衛、大目附には田原采女、はや其の日の御用も済みて互に打ち寛ぎながら、かの袖乞の噂とりどり、

「田原殿には、先刻あの袖乞の倅を駕脇に召されて、何か頻に御意の體、どうやら仔細ありけに見受け申したが、ありや元來、何者の子で御座るな」

「はゝゝゝ拙者よりも御邊こそ却つて仔細ありけちや、あの袖乞の母を近づ

けて、こまぐと何か仰せられた御様子、とかく拙者は子供相手で前後不揃ひ、とんと解せぬ事ばかり、まづ御邊の仔細を承りたい」

「や、これは毛を吹いての疵ぢや、さらば拙者よりお話し申さうが、あの母なるもの、實は聊か見知らぬものでないやうの心地が致せし故、もしやと存じて餘所ながら」

「されば同じこと、拙者も、あの子供、何とやら見たやうに存じて」

「いづれで、いつごろ」

「およそ十二年ほど以前」

「や、拙者も、あの母なるものを見知つたは十二年ほど以前」

「これは不思議」

かはりもの

かはりもの

「これは面白い」

赤井勘兵衛は高島左近が喧嘩敵手の兄。しかも其時その手にかゝつて死したる燕の彌兵衛が兄、また田原采女は高島左近が最後を見届けしのみか、人しれず死際に何事をか頼まれしとの風聞。いつとはなしに互の耳に入りて互に知り合ふ二人が、今こゝに同じ橋普請の重き御用を蒙りて、同じ往來に同じ袖乞の母子を憐れみしもの、しかも今日は自然に母と子を引き分けつゝ、互に仔細ありけの體なれば、何とやら言葉に心を置きながら顔見合して微笑みぬ、

「赤井殿、世の中には不思議な事も御坐る、あの袖乞の倅め、ちと御邊の前では憚りの姓名なれど、十二年以前に失せし高島左近と瓜二割そのまゝ、おろかや似たと申すは」

かはりもの

「それで十二年以前と申された儀も合點まるつた、拙者あの母を存じたも、やはり十二年以前、隅田川にて例の夜網に耽りし曉方、堤の上より俄に飛び込みし水音に驚いて、舟漕ぎ寄せながら救ひあけたは年若き女、しかも妊娠の體、屋敷へ連れ歸るも異なるものと存じ、幸ひ其時の船宿にあけて介抱いたさせ置いたところ、三日目の夜、行方しれず相成りしあとに残せし一通を見れば、正しく舍弟の彌兵衛が相手、かの高島左近が情の種を孕みしものとやら、なるほど心せまき女氣では、その彌兵衛が兄の恩にもなれまじと、そのまゝに打ち捨て置いた十二年の今更、あはれ袖乞にまで成り果てむとは」

「これは耳新しき事を承る、拙者は御存じの通り、左近切腹の砌は主人伊豆守が家老分にて、萬事の用意を致せしもの、ついては左近最後の節、ちと仔細あ

かはりもの

ツて、かの母なるものゝ身の末を頼まれ、また生れし子は男女いづれにせよ拙者が貰ひうけむとの約束いたせし故。そのうち橋場の父家へ罷り歸りしを尋ね行きて、さまざま心を盡せしに、また別に仔細あつて行方を見失ひしまゝ、十二年の今日まで、さてもくあれまでに落ち果てむとは案外、いかに浮世とは申せ、いかに賤しき腹に生れしとはいへ、嗚や昔の下なる左近が歎きも思ひやらるゝ、されど種は種、あらそはれぬ證據を今日ちらと見届けたるのみか、武士の一言、前約の儀も御坐れば、あの母子を拙者が拾ひあげたき心底、それに就いて赤井殿の思召、御支障は御坐らぬか、念のために」

「何として拙者に、何の支障が、よしや十二年以前、隅田川に救ひあけし時に高島左近が由縁のものとな乗ればとて、女のこと、妊娠のこと、わけて大切に介

抱養育いたさう筈の赤井で坐御る、男と男が張り合つての勝負沙汰は別段の儀、はゝゝはゝゝ」

同じ袖乞ながらも日毎々々に人の軒を渡り歩き野山の末に打ち臥す男の獨身ならねば、名ばかりの家なれど雨露を凌ぐに足るべき宿を定めて、やうく母子たゞ二人が膝を容るゝばかりの草小屋に、月もる夜半は其のまゝ寝れども、闇には斯くても燈火なくてはと、破れし壁に憂き身の影のうつれるを友として、涙に枕も浮ぶ夢うつゝ、まどろまば曉方に細き炊煙も立つや立たずや、わけて今宵は哀れ立ち添ふ宵の雨雲、ふけて其のまゝの雨となりつゝ、寸隙より吹き入るゝ飛沫に燈火またゝきて影ほの暗く、母子いよく膝摺り寄せての

かはりもの

かはりもの

物語り、家も身も濡り勝なる袖袂に餘る涙の聲まで潤ませぬ、

「これ左太郎、此方が常々から母にせがんで、聞きたい聞きたいと附き纏うた父様のこと、今宵、始めて委しう言ひ聞かさうほどに、お膝を直して、お手を差置いて、えゝ悲しや、それは大道で袖乞する時の姿勢、そでない、こゝでは誰に憚らぬ男ぢや、しかも天晴筋目の嫡々、母は賤しくとも今の境涯は人ではなくとも、氣を高う心を張つて反身になりや、とはいへ皆これ母が教へた業、生れ落ちてより十二の今日まで、あゝ堪忍してたも、世の諺に氏より生育といへど、此方こそは生育よりも氏、ながくの歳月を日に曝され雨に打たれながらその肩尻といひ鼻筋といひ、わけて眼光の凛々しさ、手足の指の瓜端れまで、さてもよくよう宵ました事ぢや瓜兩斷」

いひつゝ今更に我子の顔じつと見詰めて、はや溢るゝ涙ほろゝと落ちて絶えねば、今この悲しさのみならで過ぎし昔の春や戀しさ懐かしさに、我身ながらも思へば夢か、あまりの本意なさに何とやら怨めしの心地して、一入さらに物の哀れを催しぬ、

「其方が父様の名をいへば、この母が、其方に對うて濟まぬ數々、あやまらねはならぬほどの方、今までは、仔細あつて秘したれど、もはや言はで置かれぬ今日の切迫、まことを明せば、天下の歴々直參衆が其の中にも音に聞えた御家柄、しかも其のころ世上の小唄に唄はれしほどの男振といひ、御氣性といひ、鬼神も恐れ花の色香も恥ぢる左近と囃されて、天晴れ古今にないとやらの御人品、お年は十九、今も江戸の町々に残る繪雙紙の伊達振子といふは、眞實、其

かはりもの

方が父様の面影、また此の母は賤しき渡船守の娘なれど、十三の春より召されて奥奉公の女小姓となり、十八の夏まで父様とは一歳違ひの朝夕、いつしか、お情を蒙りて、勿體なやと思も間もなく、父様の御下城を待ち受けて俄に慮外を働いた其の男は赤井彌兵衛、燕の彌兵衛とて聞えたる不敵の人とやら。されば猶更ら平生の御氣性なとして、其のまゝに置かれうぞ、忽ち槍玉にかけられた其の彌兵衛が、もし陪臣ならば御無事であつたものを、かなしや、これも直參衆の一人とて、松平伊豆守様が御上屋敷での御切腹、その御最後の前夜より御家老の田原様が情誼にて、そつと人しれず此の母を召し寄せられ、竊に御湯殿で御意を得たが今生のお別れ、其方を宿して三月目の十七日、さりながら左太郎、よう聞きや、父様が御切腹は凡例もない御立腹とて、大名が二人の御使者に、伯父御様の御檢死、伊豆守の御家來衆も物蔭に詰め寄つて見物せられたほどの晴業とやら、生きての花ぢや死んでの花ぢやとて、後々までも世上に唄はれた其人の忘れ形見に、何事ぞ袖乞さす母が氣は千萬無量の悲しさ、辛さ、切なさ、口惜しさ、無念さ、我心に我身は恥ぢて死んで退きたいは山々なれど、せめて、其方が十五になるまでその十五の曉には父様の事も打ち明け、また此の母がためには父、其方のためには外戚の祖父に當る人を殺した奴、その怨恨も晴らして貰ひたいが山々で、一念、こゝまで、じつと忍んで堪へ堪へし折も折とて今日のこと』

語り終るや否、俄に我子の手を取つて引き寄せながら、

「これ左太郎、まだいふ事があるぞや」

かはりもの

母は涙に浮くばかりなる身を摺り寄せて、今更に我子の手を取りつゝ、つくぐと其の顔うち守りながら、隙間より吹き入る夜半の横飛沫に濡るゝも知らず、いつよりも濕り勝なる言葉の端々あはれも深く、更け行くまゝに漏るゝ泣く音は腸の血を含みて吐くかとも思はれぬ。

「このほどより同じやうなる二挺の乗物が往き返りの度毎に、駕脚をゆるめて同じやうなる情の露、さても不思議なこと、若黨といひ槍といひ、いづれ歴々の人とは思ひながら、たゞ途上の母子が哀れを見兼ねてか、但しは其の他に仔細ありてか、もしや、昔の身知られてかとも思つたなれど、いつとても笠越の母が顔、餘所より見え透く筈はなしと思案とりどりの末に、ふと心附いたは左太郎、其方ぢや、をりく母が目を偷んでは笠を脱ぐ時、通り合した駕

かはりもの

の中より、見れば見るほど其の筈、下司の血筋に生れて腹からの袖乞とは自然に違ふばかりか、人にも唄はれ世にも勝れし父様の面影をうけて、その瓜兩断には誰しも目に附く不審の第一、それが度々に重なりての果、さてはと思はれたものでがな、折も折とて今日の晝ごろ、橋普請の人夫どもに苦しめられ、わけて其の中に小頭の印つけたる四十あまりの大男、おのれから黒牛と名乗りし時の母が驚愕、これ左太郎、夢にも忘れまいぞや、あれこそ母が父、其方の祖父が生命の敵、それとも知らず手首に喰ひ付くや否、今年やうく十二の小腕に血を含んで追ひ行きし勢ひは、正しく自然と叶ふ血筋の縁の怨恨を返すべき前兆、また、いかなる剛敵にも怖れぬ氣性は争はれぬもの、父様に其のまゝの凛々しき怖ろしさ」



かはりもの

猶も我子の顔、しみるゝと見入りて、思はず漏るゝ忍び音の聲を立てじと袖かみしめ、果は壁にうつれる我影の何とやら今夜は薄き心地に見返りながら、  
 「人夫どもが立ち塞がりて口惜しい折しも、雙方より若黨が走せ寄つての聲々に奉行の赤井殿ぞ大目附の田原殿ぞと聞くや否、はつと驚いて俄に逃げ出せし人夫よりも母は猶更に一入の驚愕、その奉行の赤井といへば父様の御下城を待ち受けて慮外せし敵手の兄なれど、あの黒牛めに追ひ詰められて隅田川に身を投げし時、おもはず救ひ上げられし人、其方も母も水に溺れて無い筈の生命を助けられた恩人、また大目附の田原といふは元來伊豆様の御家老で、御切腹の砌、そつと人しれず此の母を召し寄せられたのみか、まだ生れぬ其方の行末を父様より頼まれし御人、されば其の後も橋場の住居へ度々のお厚情、出産の

上は我子にせむとまでいはれたれど、仔細ありて其の御恩人を捨てしより十二年の今、この袖乞の身に落ち果てゝ、思ひも寄らぬ恩人と恩人、しかも雙方とも切ない程の若しい恩人に見附け出され、其方は田原様の駕、母は赤井殿の駕、母子もろとも右と左に分けられて問ひ詰められし時の辛さ恥づかしさ、つひ眼前に深い流水はあり、いらぬ生命の捨て所ろは、かゝる時こそと思つたなれど、たゞ一言、其方に心を引かされて其のまゝ血の涙、これを思へば死んで濟むほど人の身に易い事なけれど、死なれぬ怨恨と愛著とに引き連れられて十一年の歲月、さまざまの憂き苦勞に、ようも今まで持った生命ぞ、それは兎も角、明日よりは何とせう、おなじ川岸に薦を敷いて同じ駕二挺に見られては、もはや御墓に濟まず、其方の身の末までも名の汚れ、さりとて今更、この身か

かはりもの

かはりもの

ら振り捨てし田原様の袖にも縋られず、赤井殿の心に對しては猶更のこと。所詮このまゝ、この母は』

水の流れと人の行末、しれぬが浮世の常ながら、おもひきや、あれほどまでに落ち果てむとは、數ふれば十二年、さぞや憂節しけき涙の淵に浮ぶ瀬もなう、朝な夕なに泣き暮したらむが、それにしては生命のあるものかな、まして爪端れの尋常さ昔に變らず、わけて忘れ形見の男の子こそ流石に種は種、小唄に殘る左近が面影そのまゝ今見るが如きのみか、今年やうく十二の小腕に身を躍らしつゝ、あの鬼に等しき大の荒男を驀地に追ひ行きし勢ひ、天晴れ膽魂まで父に似たるぞ、よしや片輪に生るればとて武士の最後に約束しかと頼まれし田

原采女、そのまゝ眼前に捨て置かるべき、さるを幸ひ慥に逸物、いざや拾ひあけて草葉の蔭に手向けむとぞ思ひ定めぬ、

きのふの今日、何とかせし、假令あのまゝ身を恥ぢて出でざるとも、そと前夜のうちに人を忍ばぜつゝ、母子が露の生命の置きどころ、その草の草の隠れ家を見届けしからは、もはや方便ありとていつよりも、心せくまゝ屋敷を立出で例の川岸まで來りて乗物の中より窺へば、今日も母子二人と思ひの外、母の姿はなくて其の子のみ小さき編笠に面を包みつゝ、兩手を膝上に置いて差俯き勝の體、しかも常よりは身を潛めて、たゞ一人しよんほりと坐りぬ、

恥ぢて出でざるか、疾病で引き籠りしか、恥ぢてならば其の身を曝すとも忘れ形見を出すまじ、もし疾病ならば外に介抱の手もない母子たゞ二人、その子を

かはりもの

かはりもの

出すべき善なし、さては飢餓に迫るが悲しさかと思へども、このほどより與へし我が慈悲の露のみにても今の彼等が身には七八日の安樂、されば何のためぞと眉うち擡めながら、そのまゝ打ち通りて假屋の御用部屋に入りつゝ、事すみける後、おのが若黨を走らして呼び迎へぬ、

やがて若黨に伴はれて入り來りしを休息所の庭前に差廻して菓子と菓子を與へつゝ、田原采女しづかに縁端に立ち出でて笠を脱いだる面じつと見下せば、また昨日よりも父に其のまゝの面影、いかに父子とはいへ、かくまで肖るものかと、今更に一入の哀れを催しながら、

「今日みれば汝ばかりぢやが、母は何と致した」

「はい、母様は今朝より、お墓まるりを、するとして」

「むゝ、墓參か、それは元來、誰の墓碑へまるるぞ」

「誰の墓とも、きゝませぬが、いつも母様が一人、なれど、花をあける事も出來ず、たゞ御門の外から、拜むばかりでとやらで」

「あゝ、さもあらう、今の身では、さてくゝあはれの至極、いちらしいものぢや、時に汝は、いつまでも、そのやうに袖乞いたしても、悲しうはないか」

問はれて俄に羞俯きしが、やがて振り上げし面を見れば、いきいきと張り切つたる黒目勝の兩眼に溢るゝばかりの涙を含ませながら、田原が腰の物の輝くを覗ふが如く、すつと見詰めて目を注ぎつゝ羨ましけの顔色に、田原采女、おもはず膝を進めて微笑を漏らしぬ、

「もし袖乞を今にも止めたらば、およそ世の中の、何になりたいぞ」

かはりもの

かはりもの

「武士になりたい、なれど武士になる前、人ひとり斬り殺したい」

いひつゝ額越に軒の廂を睨みあけたる體、ふさくとせし黒髪おのづから戦いで眞白の顔に凄みを帯びつゝ、何とやら思ひ切つたる眼ざしの鋭さ、ことし十二の身とも覺えぬ猛勢、あらたに巢を出でたる隼の如し、

「むゝ袖乞から武士になりたいといふほどの根性では、さのみの不思議とも思はぬが、さしあたり異なる事を申す、その斬り殺したい對手でもあつてか」

「斬り殺したい奴は」

「何者ぢや、いづれに居る」

「いや、いふまい、もし、その脇差を、借れるものなら今日中に斬り殺して、お目にかけてい」

「面白い、流石は種ぢや、よく言つた、その敵手の名をいはずして斬り殺した後、死骸を見せて返答せうとは天晴、蛇は寸にして牛を呑む氣とやら、貸す段か、呉れもせうが、まづ袖乞を止めい」

「これ止めては、その日から」

「はゝゝゝ猶更ら面白い、まだ何處やらが子供ぢや、はゝゝはゝゝ」

今年やうく十二の袖乞が身として、假小屋ながらも始めて見たる大目附の休息所、うしろを取り圍ふ金屏風の光輝に眼を射られて顔色を失ふかと思ひの外、歴々の兵士が前にも更に隠したる體なく、乞食やめて武士になりたいとは流石に血筋、まして人ひとりを斬つて後といふのみか、その敵手ありやと問へ

かはりもの

かはりもの

ば死骸しかいにして見せむとの返答へんたふ、天晴あつはれ仕上しあけたる男おとこも及およばぬ膽いぢの太おほさよ、さりながら、まだ十二じふにの小腕こて、しかも其その對手あひてさへいはぬものに、刃物はものを與あたへむことは固こよりならぬこと危あやき業わざと、別べつに包つみし一包ひつの金子きんぎを與あたへて、母ははに見みせよといへば、押戴おしいたいて残りのこ惜おし氣けに振かり返かりながら出いで行ゆきぬ、

なるほど今日けふは十七日じふいちにち、月つきこそ變かはれ高島左近たかしまざこんが現世このよを去さりし命日あいにち、さるを其その左近ざこんが子こを生うみし母ははとしての墓はか參まに、あはれ親したしう差寄さしよつての香華かうけも叶かなはず同お向かうも得えせず、たゞ遠とほき寺門てらもんの外そとより墓はかある方かたに向むかうて餘所よそながら伏ふし拜をがむのみとは、さてくゞいぢらしの心こころかな、されど其その子この逸物いづつは故人こじんへの手柄てがら、袖乞そでこしても心こころまで落おち果はてざるは狎更なほらの手向たむけぞと、今いましも出いで行ゆきし左太郎さたろうの後姿うしろすがたを縁端えんぎより見送みおくりながら、何心なにこころなく脇差わきざしを取とつて傍かたへに差置さしおき、袴はかまの紐ひもを結むすび、

直たださむとする折をりしも、さつと蝗いなごの如ごとく飛び込こみ來きりて躍をどり上あるや否いな、其所そこにありし脇差わきざしとつて一散いつさんに遁にけ出しぬ、

さすがの田原采女たはらさいめも、はつと驚おどろいて立たつたるまゝあまりの不意ふいに呆あれて言句ごんくも出いでず、しかも俄たはかに人ひとを呼よべば袖乞そでこの身みとして歴々れききの脇差わきざしを偷ぬすみし罪つみ、何なんとして死罪しづいを免まぬるべき、我われもまた袖乞そでこの小忰こせがれに腰こしの道具だうぐを偷ぬすまれたりとて人ひとに面おもて合あはさるべきや、南無三寶なむさんぼう、油斷大敵ゆだんたいてきと自己おのが腹心はらこゝろの若黨わかつたうを呼よびつゝ追おはせむとする一刹せつな、假小屋かりこやなれば門前もんぜんまで僅わずかの間數けんすうといひ建物たてものさへ淺あき耳みみを貫つらぬいて忽たちまち聞きゆる人聲ひこゑ物音ものおと、つゞいて一人ひとりの若黨わかつたうが走はり入いつての急訴きんそ、

「只今ただいまお召めしになりましたる小忰こせがれが、門前もんぜんにて祖父ぢいの敵かたを見附みつけたりとの騒動さわぎしかも刃物はもの三昧さんまいの勢いきほひ」

かはりもの

かはりもの

きくや否、さては小天狗に等しき振舞、今しも人ひとりを斬りたしとの言下に  
虚儀なく、しかも我が詰所の門前とは天晴れ運の善き奴かな、

「それ者ども、道具に取巻いて遁すな、おツとり圍うて雙方うち静めい」

叫びしまゝ太刀を提げて走せ出づれば、や、眞實なりけり、人父小頭の印つけ  
たる毛脛の大男を道路の中央に遮りとどめて、小腕ながらも咽喉笛に飛びかゝ  
らむばかりの猛勢、今しも躍り込んで偷んだる田原采女が脇差を抜き放ちて、  
眞白の満面うす紅に立ち對ひし體、荒木けづりの仁王を見上ぐる制多伽童子に  
似たり、

田原采女は元來武功の場數者として、おのが若黨に雙方を取り圍ませながら、ひ  
とまづ左右に引き分けて、おのくを打ち守らせつゝ、門前に床几を据ゑて腰

うちかけ、きり桶の水を呼んで左太郎を近く招き、しづかに一杓を含せし後、

「飲み込むな、たゞ口を濯いで吐き出せ、飲むなく、息が切れるぞ、儲、汝

は親の敵か同胞のためか、何者の仇討ちや」

「祖父の仇敵、あの奴は、黒牛の權藏といふ奴」

「汝の名は何と申す、年は幾歳ぢや」

「左太郎、十二歳、彌助といふものゝ孫で御坐ります、その祖父を殺された敵  
討」

「但し助太刀あるか、父は、母は」

「誰も、私一人、父も、母も、御坐りませぬ」

「それでよし、誰か此者の働きよいよう、介抱して取らせい、役目の外ながら

かはりもの

かはりもの

居合した武門の常、田原采女が見届けるぞ」

田原采女、あらためて彼方を睨みつゝ、

「今この者の對手に名乗りかけられた男、黒牛とやら申すは其方か、これへ出い、や、小頭の印を纏ひ居る、まづ、この印衣を剥いで取れ」

それ喧嘩よ敵討よと叫び合つて、忽ち四方より馳せ集まりし見物の人浪に、おのづからなる、埒を構へしが如く、まして田原采女が物馴れたる指圖に、若黨いづれも立ち働いて行届かぬ限もなければ、おもはぬ晴の勝負に四邊の人目きらめいて、六尺を越えし野猪毛の大男と四尺に足らぬ小兵の立合、見物おもはず関の聲をあけて立ち騒ぎぬ、

かはりもの

黒牛の権藏は當年とつて四十三歳、世にあるほどの強慾非道を仕盡して怨恨の涙を身に浴びたる不敵の悪黨、高が十五に足らぬ小倅一疋、ひねり殺してくれんすと笑冷ひしが、南無三寶、おもひきや、今となりては逆も遁れぬ生命の瀬戸際、しかも小頭の印衣を眼前に剥がれては忽ち渡りの無宿者となりて、たゞ自己が持つて生れし手足ぬつと現はしたる素肌のまゝの死物狂びに、もはや誰彼なしの總敵手、指頭にかゝる奴原いちくゝ掴み挫がむと、曉の明星に似たる眼を光らして四方を睨み廻す折しも、流石に平生の馴染甲斐にや、五尺あまりの櫂の打棒を投げ入れしものあり、

黒牛の権藏、おもはず振り返つて手に取るや否、ぬつと更に勢ひを得て仁王の如く立ッたる體、今年やうく十二の小兵に見並べて、見物いづれも手に汗を

握りぬ、

かはりもの

田原采女、かくと見るより、おのが若黨のうちなる武藝者一人を差招いて、黒牛の權藏を指さしながら、

「俄に目分量が取り合はぬぞ、彼奴あの得物あるからは、小倅に助太刀あるべき筈、それ、初太刀を打て」

はッと答へて立ち對うたる若黨、わざと脇差を抜いて太刀そのまま腰に横たへながら、振り返ッて佐太郎を招きつゝ、

「無手のまゝ放し討にさすべき筈を、あの得物を持ちし今の體にては、初太刀を我に任されい」

後方よりは頻りに田原采女が聲、

「小倅、急くな、急くな、しかと初太刀を見定めて打ち込め」

黒牛の權藏を左右より圍ひし田原が手のもの兩人、さツと退けば、忽ち大喝一聲、おのが名に等しき猛牛の吼ゆるが如き聲して眞向より打ち下すを、若黨が心中、なるべく敵を勞らして譲らむとの情誼にや、飛鳥の如く掻い潜ッて縦横に遁け廻れば、得たりノと追ひ詰め追ひ込む敵の腕首、やうく鈍りしと思ふころ、やツとかけたる矢聲もろとも右の肩口より肱の屈曲を七八寸、瓜の如くに斷ち創るや否」

「それ初太刀が濟んだぞ、かゝれノ」

あツと答へて矢の如くに飛び込みし猛勢、たれ教へねど流石に名木の種、踏み込めノと田原采女は我を忘れて床几を蹴放ちつゝ、手に持てる扇子に自己が

かはりもの



かはりもの

小膝を丁々と打ち叩きぬ、

をりしも今日は過ぎ給ひし人の命日とて、餘所ながら涙の所向に立ち出でし母の小浪が、やう／＼今こゝに歸り來て見れば、我子の影さへなくて彼方に人の黒山、何事ぞと思ふ間もなく、後れ走せに聞き傳へて馳せ行く人の聲々、袖乞の子が敵討ぞと聞くや否、はつと驚いて其のまゝ大地に伏し轉びしが、また忽ち起き直つて今は我から編笠を脱ぎ捨てつゝ、子を思ふ親の一念、ましてや思ひ切つたる胸も張り裂くばかりの勢ひに、帯しめ直し裾ひき絡けて、みだるゝ髪を巻き付けし荒木の大櫛、抜き取つて右手に握るや其のまゝ、得物は只これ一物、鐵ともなれ白刃ともなれ、

かはりもの

黒牛の権藏いかに死物狂ひの荒男とはいへ、物馴れたる武藝者の初太刀を生命と頼む右手の急所にうけて、あつと驚く寸隙もあらせず老功の田原采女が大喝一聲、それ打ち込めと叫ぶや否、若黨が四方を驅け廻つて鋭き矢聲の其中より、今年やう／＼十二の小腕ながらも生れつゝいたる不敵さに、脇差は鐵をも斬るべき關の業物、閃く白刃の影に蝗の如く飛び込みしかば、流石の惡黨も思はず身を躍らして十間あまり遁け出しぬ、

をりしも見物の人浪を掻き分けて鞠を抛ぐるが如くに走せ入りつゝ、石に躓いて控と轉びながら、

『油断しやんな左太郎、母が助太刀するぞや』

聲もろとも、我子を思ふ女の念力がばと、跳ね起きて振り亂せし黒髪の宙に渦

かはりもの

巻くかと思へば、あはれ唯これ一個の得物、右手に握みし荒櫛を逆手に取つて敵の背後より眞一文字に飛びかゝりぬ、

かくと見たる田原采女、危し、危し、あれ止めよと叫べば、若黨いづれも走せ寄らむとする間一髪、見物おもはず関の聲をあけて、手に汁握りつゝ一時に大地を踏み轟かしぬ、

母は子を思ふ一念に我身を忘れ、子は母を思ふ一念に我身を忘れ、母子もろとも互の生命を抛け捨て、若黨どもが驅け寄る寸隙もなく、前得より等しく飛びかゝりしが、あはれ左太郎の太刀や早かりけむ、雙手の脇差うちかぶつて躍りながら斜めに斬り込みし白刃の下、紫の血煙たて、打ち斃れしは敵の權藏のみと思ひの外、南無三寶、天なるかな命なるかな、眞向より斬り込んだる小脇の勢

ひ餘つて母が乳の下を劈きぬ、

仆れし敵が再び斬り込むとも、何とて振り返る寸暇のあるべき、左太郎そのまゝ泣聲あけて、母に抱きつけば、初太刀を打つたる若黨、さつと駆け來りて權藏を引き寄せながら、

「天暗れ母子で討つたるぞ、最得を刺せ、とゞめを刺せ」

いひつゝ母子が手と手を持ち兼ねて脇差の柄を握らせながら、權藏が胸元ぐつと刺し通せし後、左太郎を掻き退け母を抱き起して其の疵口を見れば、あはれ深し、さても深し、心得たる手練の鋒鈍あやまつて伸びしとは違つて、前後無左別の一念に凝り固まつたる小腕の悲しさ、飛び込んだる自己が身の勢ひと共に深くも打ち込んだる無残の體、とても叶はぬ生命なれば、そのまゝ假小屋の

かはりもの

かはりもの

うちに運び入れて、普請場の手醫者を招くほどもなく、はや息の根、たえぐに顔の色さへ變り果てつゝ、震ふ手先に物を探るが如く細き聲もて我子の名を呼び續けぬ、

田原采女おもはず男泣きの涙を絞りて、前よりは左太郎に確と抱かせ、背後よりは其身その手に抱へて耳に口よせながら、

「すぎし高島左近殿の御内室と身受けまするぞ、氣を確乎に持たれよ、これは御存じあるべき筈の田原采女で御座る、前なるは御息ぢや、お身こそ不運の今このまゝに逝かるゝとも、子息は天晴れ父御に勝しての行末めでたう、不宵ながら田原采女、いつくまでも後見いたして、また世に唄はるゝ二代の男振しかと、請合うた」

あはれは武夫の情誼、これを最後の土産、せめて冥途を送らむとての芳志、しみぐと今を餘餘の腸にや通じけむ、さも嬉しげに首肯しが、そのまゝ我子を抱へて前に伏しつゝ折り重なつて絶え入りぬ、

おもへば、名木の花の男の一盛り、その朧夜に契りし戀も夢うつゝ、さめて涙の暁に入らぬ生命を捨て兼ねてより十二年、捨つるに勝る浮世の憂節、さまざまに浸し甲斐もなう、何事ぞ袖乞とまで落魄れし身の果を、いかに敵の斃れし嬉しさの餘刃とはいへ、おもひきや我子の白刃にかゝりて死せむとは

いかに場數者の田原采女が行届いたる指圖とはいへ、いかに若黨のうちの武藝者一人すゝみ出でて初太刀を討ちしとはいへ、きけは今年やうく十二の小腕

かにもりの

## かはりもの

まして武家生育でもあることか、あはれ母子もろとも露の生命を保ちし袖乞の身にて、誰が教へしか、天晴れ名乗りかけたる振舞といひ飽くまで落着いたる性根といひ、あれほどの荒男を仕留めたるは古今に凡例のないこと、さても不思議の天生、行末の怖ろしや、腹からの賤しいものであるまじとの風聞とりくくまた何時しか誰いふとなく、それも其筈ぢや、この大江戸の小唄に唄はれし伊達振子の名物、高島左込が人しれず契りし戀の忘れ形見とやら、しるものは知る其のまゝの瓜兩斷、仔細あつて落魄れたれど、暫時かゝりし月の村雲、あれが何として腹からの袖乞に生るべきぞ、流石に名木の種なればこそ、やがてまた唄はるゝ二代日の伊達振子、今から目に見るやうな男振、さてもくあれほどの子を持ちながら、その白刃にかゝりて思はぬ最後を遂げし母御は何の因果

ぞ何の報いぞ、いや、死んだ母御の因果よりも生きて残りし哀れの物語、たとひ仇敵を討つたる小腕の過失とはいへ、なさけなや現在うみの母を手にかけてるは不孝の随一、その身に取つては猶更ら返らぬ不運の随一、されば世に交はりて果敢なき行末の男を立てむよりは、傳へきく父の左近が回向のため、過つて失ひし母が菩提のため、まだ咲きも出でぬ日蔭の苔に其のまゝ墨染の衣を着せし十三の小法師、みるから涙の種ぢやとて、知るも知らぬも語り傳へて江戸中の袖を絞りぬ、

## かはりもの

小石川の白山下の曹洞派の禪窟として世に聞えたる瑞鳳山祥雲寺は、そのむかし小田原北條家の侍大將に江戸の平川を領せし遠山隼人正が創立にして、駒込

かはりもの

の三軒寺第二世の安充和尚を開祖としてより、こゝに年久しく世人の随喜渴仰をあつめしが、今の住職たる淨眞和尚は彼の田原采女が法談歸依の老僧として、左太郎がために師と仰がせつゝ、あはれ今年やうく十二の青道心、さながら名筆の畫より脱け出でたるが如く、當寺の脇士に名高き文珠普賢の御像も何とやら面恥づかしげに見え給ふとの風聞とりぐ、傳へ傳へて春くる毎に雪か雲かと見紛ふ門前の八重櫻よりも一入の名物となりつゝ、ゆきかふ人の歩を停めて振り返らせぬ、

さても小唄に残る高島左近が忘な形見といひ、身は袖乞とまで落ち果てながら十二の小腕に大の曲物を討つたる膽魂、流石は父の子なり、天晴れ思ひやらるゝ行末の男振、くわツと持つて開いて名木の花や時めく一盛りの面白さもある

かはりもの

べきに、何事ぞ人には枯木の端といはるゝ俄法師の腰衣を纏うて、抹香臭き經机に生涯を埋むる哀れさよと、兩刀の柄を叩いて袖しほるもあれば、あれをあのみまゝ浮世の外に捨つるか、うきたる心の女童が口の端にまで惜しまれぬ、されば高島左近ほどの名物を父に持ちながら、その父さへ十九を一期に脆き最後を遂げしのみか、たゞ床しさの名を聞くばかり顔さへ得知らぬ忘れ形見に生れて、しかも袖乞とまで落ち果てし十二の曉、たまく世に出づべき功名手柄も誤つて母を殺せし不運の行末、もはや武士に取つての不吉ぞ、とても男を立つる甲斐あるまじと、田原采女が涙と共に諭せし言葉を守りて、左太郎もまた子供心に、しみぐと浮世を飽き果てゝ、こゝに淨眞和尚が徒弟となりて其名を淨辨と更めつゝ、いづれの道にも生れながらの逸物、はやくも道心堅固の

かはりもの

兆を現はして、果は前世より名僧智識になるべき法の因縁の深かりけむとぞ思はれぬ、

左太郎といふ名を浮世の置土産に残して、淨辨と更めつゝ當寺に身を託せしより三月趣の今日このごろ、はやくも朝夕の勤行に馴れて、鼠木綿の袖みぢかく腰衣を著けて手足まめやかに立ち働く風情、剃り圓めたる青黛の頭に雪を欺く額際の照り添うて、いきいきと黒目勝に張り切つたる小法師の體、しかも天生の才氣おのづから爪端にまで行き渡つて、わざとならぬ自然の愛敬こほるゝ中に、どこやら凛と強ねたる一癖は流石に父の種なれど、筋目を語らねば、たぐみる朝ほらけの露を捧げて泥中を抜け出でたる小蓮華、おもはず人の執著を曳

いて物の哀れを催しぬ、

されば當寺に修行せる十七人の學寮輩は、いづれも淨辨の來りし日より互に、目を敬て、警め合ひつゝ、そりやこそ我等がための惡魔外道が來たぞよ、あはれ鏡花水月、ゆめにも多年の道心を取り外して煩惱妄執の淵に落つるな、いたづらに咲く春の梢に迷うて忽ち來る秋の悲しみを知らざるは門外の奴、たゞ寒林枯木に專念修行の春をうつつして絶えぬ心の色香を樂しむべし、さればこそ大切の一言、柳は縁、花は紅、からく喝と叫んで我みづから我を吐しつゝ、坐禪を組んで瞑目一番、形容ばかりは死灰に等しけれど、かなしや學徳いまだ至らぬ血氣の若僧輩とて、いつしか描ける如き淨辨が姿に胸裡むらくと搔き亂され、はつと驚いて目を開けば、生きたる小蓮華ちらく前後に通うて、露

かはりもの

かはりもの

にほやかに物を問はれ心やさしく用を辨ぜらるゝ苦しさに、もはや堪らぬと其のまゝ遁け出しながら魂魄は後に残つて淨辨が腰の邊りに付き纏ひつゝ、果は十七の煩惱ころゝと脚下に轉け廻りて、互に打ち合ひ競ひ合ひぬ、

おもへば釋尊も生れながらの佛でなく、いとし可愛の妻子を持ち給ひし後の事、祖師も九年の面壁し給ひながら、をりゝ尻目使ひをなされしとの噂、さるを末世の我等が此のまゝ無事の修行に道心堅問のあらう筈なし、されば女犯こそ障碍罪惡の随一なれ、若道の男色は聊か申驛の立つべき道理、ましてあれほどの執著物の眼前に差置いて何とて色即是空の悟らるべき、もはや堪らぬ堪らぬと互に争ひ合つて戀の奴となり果てつゝ、右からも淨辨、左からも淨辨、あけても暮れても淨辨々々と前後より絶え間なく付き纏はるゝのみか、いつしか嫉妬の焰と焰とを焼き合つて佛德祖師の像前をも憚らず、墨染の衣を引き裂いて掴み合ひ、如意棒を振り廻しての喧嘩沙汰さへ起りしかば、師の坊の淨眞和尚も流石に雪眉をば擧めて呆れつゝ、その後は絶えて淨辨を學寮に近づけず、朝夕たゞ奥まりたる方丈の我手許に召し使つて、やうゝ一日のうちに二三度みるや見られぬ色香の尊さに、いよゝ霞を隔てし高根の花の心地して、學寮の徒輩ますゝ狂ふばかりに立ち騒ぎぬ、

春情の兆せし牧の牡馬十七頭に一頭の牝馬を放ちしが如く、前後を忘れて入り亂れつゝ狂ひ出せしかば、いかな乗手も鞍坪の安からぬ、今日このごろ、幾度か講堂に呼び集めて轡を箝め直し手綱を引き絞りし甲斐ありて、その後は次第に鼻息を収め尾坪を垂れしかど、なほ夜に入れば何とやら蹄を鳴らして鬚を打

かはりもの

## かはりもの

ち振る體に、師の坊も思ひの外に心を悩ませつゝ、ことし十一の今のうちさへかくまで煩惱の種となるべき淨辨、まして十六七の曉ともなれば相手かはりて浮世の戀に取り巻く女童ぞ嘸や立ち騒がむ、やれ危し危し、いかなれば片目片輪でも濟むべき佛徒の因縁ふかき彼が身に、古今無雙の美男とは生れたるぞ、無用の天成、入らぬ麗質、されば今より厳しき心の埒を結はする修行こそ大切なれと、一入さらに淨辨を打ち圍うて寸隙もなく警め諭しぬ、

祥雲寺の客殿に主客差對うての物語、淨真和尚は今年七十の老僧ながら、流石に聞えたる禪窟の學徳、幼少より諸國の雲水に身を任して雨露霜雪を宿とせしかば、なほ鏤鏤として在俗の壯者をも凌ぐの骨格、たゞ眉長く霜を帯びて鍛錬

まばらに垂るゝのみ、客は田原采女、これも武士に取つての場數者、松平伊豆守が家來より將軍家の鑑定に叶うて抜き出されしほどの男、しかも道こそ變れ年こそ違へ、互に隔意なき平生の交際、參禪の師なり、布施の檀那ともなる間柄なれば、たゞ一碗の茶味も華奢千金に勝るの心地せり、

「さて和尚、あの小伴、いや小法師が其の後の體、如何で御坐る、道に取つての御鑑定は」

「なか／＼の逸物ぢや、よい弟子を賜はつたぞ、當寺には御承知の通り雲水行脚の出入を別と致して、絶えず十七人も學寮の徒弟ある中に、年と學識とは當然とても事なれど、あれこそ最後大切の法燈、一段あきらかに掲ぐべきものと見受けましたぞ、母が一夜の物語りに敵あることを知つて忽ち十一の小兵に

かはりもの



大煩惱を起し、その敵に出逢ふや否、御邊の脇差を偷み取つて其のまゝ馳せ向うたる一利那の活動が即ち彼の本来、誤つて其の母を殺し悔いて其身を當寺に託せしは猶更ら以て得難き法の因縁、いや、たしかに文覺の流で御坐る、たゞあの文覺坊が再び娑婆の煩惱に立ち歸つて伊豆の流人を唆かし、或は亡國種の生命乞などせぬやう致したいものぢや、わけて畫がける如き天性の美僧、これまた大切の一修行、流れざらむとすれど浮くが本来の木の葉、いつしか水に誘はるるの恐れあり」

「なるほど、大切の修行、十二、十三、十四五までは兎も角、はや十六の曉となれば、悟兩道の境目、されど先日そと申せし通り、彼が父の高島左近は、その頃の小唄に唄はれしほどの美男、しかも歴々の筋目をうけ有徳の家に生れた

れば、おのれ好まずとも流れ易く染み易き世の常、いつしか何事も心のまゝに振舞うて果は酒色にも耽るべき筈なれど、元來が容貌にも似ぬ武者立の本性とて十九の曉まで更に浮きたる沙汰もなく、たゞ朝夕の邊り近く召使ひし侍婢、彼が母は、しかも異なる事ながら、きけば唯一度の契りに孕みしとやら左近切腹の砌、妊娠と知りつゝ、現在おのれが一家一門にも得言はず、あかの他人の拙者を見込んで人しれず頼み聞えしのみか、あれほど猛氣の男ながら、その時こそは満面を紅にして、あはれ無念や、いづれあるべき身分相應の婚儀も待たず、點の入らざる文字に徒らの一點うちしがため、つひに讀まれぬ不覺の無筆男となつたりけりとの一言、もし子は父の性をひく世諺に思ひ合せば、たとひ彼が古今に凡例なき獨歩の美僧なればとて、さのみの事はあるまじき筈、されど人

かはりもの

は心の器、心は人を操る不定の緒、今の中より一段きびしい痛棒の味を教へ置かれたい」

「されば其事ぢや、やがて大木になるべき芽生え、これを育て、枯らさぬは其木のためのみでなく、家を作つて棟梁に用ひむとする工匠の本分、つまりは彼を天晴の名僧に仕立て、佛徳報謝の一端に供へむとの念願、あだ疎畧に存すべきや、さりながら、俗人の目には可憐ら花の苔の色香も知らで無残に撈り取つたといふ筈、みれば見ほど、眞實や天の成せる美質、青黛を塗れるに等しい頭を丸めて、名筆の畫も及ばぬ目鼻口許、勤行の暇には庫裡に追ひ使はれて雪を欺く手足に火水の働き、辛しといへば辛けれど、昨日まで十一年の袖乞を哀れまずして佛徳に近づく今日の修行を哀れぬ世の人心なほさら以て彼が爲に用心

## 專一

主客の物語りを、折しも左太郎の淨辨、ふと襖越しに聞耳たて、何をか思ひけむ、しきりに小首を傾けしが、やがて其のまゝ靜に立ち去りぬ、

うまれついたり容貌にて、もとより我なす業にはあらねども、道の先達とも頼み法の兄とも頼みて教を乞ふべき十七人の學寮が、何事ぞ我ゆるゑに多年の觀念修行を取り外して争ふのみか、第一が師の坊の御心を惱ませて、片目片輪でも佛弟子には不足なしと仰せられたる一言、しかも今朝の襖越に立聞けば、御恩人田原殿との物語に、今は兎もあれ角もあれ、やがて十六七の曉が迷悟兩道の境目、その瀬戸際が思ひやらるゝとて、この容貌を深くも氣遣はれたる言葉の

かはりもの

端々、あはれいづこの道にも何とて我は斯くまで心にもなき運命を作るか。さても罪ふかすと、そのまゝ本堂に馳せ行つゝ、祖師が坐禪の前に身を伏しつ近ごろ覺えたる經文の一節を誦せしが、忽ち何をか思ひけむ、一團の猛火を紙もて包めるが如き天生不敵の小法師、がばと跳ね起きて四邊を見廻しながら。よししく、さらば身のため一山のため、この面の皮一枚を剥いで佛に捧けまつらむと、人しれず怖ろしの膽魂を動かして其の夜の更くるを往ち受けぬ、をりしも雨そば降りて夜は次第に更け渡りつゝ、方丈の庭に廂を包んで廻れる大木の梢おのづから風を生じ、白山の森に棲む梟の聲かすかに聞ゆるのみ、はや師の坊も寢屋に就き、學寮の窓も閉ぢて無明の夢や結ばむ真夜中ごろ、そつと紙燭を點して庫裡の方に忍び入り、爐の埋み火を掻き起し炭を偷んで大の火

桶にうつしながら、二尺に近き鐵の火鉢を持ち添へて本堂に運び出づれば、宵に捧げし佛燈たゞ一つ闇を破つて明滅たる中より、運慶が畢生の名作と聞えたる丈餘の祖師が坐像、ほつと胤けに現はれ給うて生けるが如き眼中の物凄さ、たゞさへ梵音すでに絶えて何物か夜陰を襲ひくるかと思ふばかり、いづくともなく炷籠めたる不斷の線香に誘はれて、一入さらに肌寒く心氣澄み渡る其の中央に、ことし十二の淨辨たゞ獨坐、默然として何事をか念する、音なく聲なく息を殺して死せるが如し。

寂寞たる一山の夜陰いよく深く、明滅たる佛熱の光り漸く消えなむとするころ、傍らに盛り上げたる火桶の炭火は次第に赤くなりて、祖師の木像に對へる淨辨の姿を薄紅に照り返す折しも、かの二尺に近き庫裡の長火箸を採つて深く

火中に突き込みながら、しきりに首を俯しつゝ、満身の太息を含んで吹き立つれは、ほつほつと闇を破る火影は稻妻の閃き渡るが如く、果は炎々たる焔の舌を吐いて燃え上りしかば、淨辨しづかに自己が袖を火箸に巻き添へて、そろりと引き出せしが猶心に飽き足らざりけむ、そのまゝ又もや深く突き入れて念物もろとも一時間あまりを経した後、ぬつと引き出せば一條の朱を注ぎたるに等しく、黒闇を縫ひ破る二尺の火柱いと物凄く、ちよろくと青みかゝりし火心の餘煙を尖頭より吐き出しぬ、

眼前に十七人の學寮を迷はする我この面の皮一枚、師の坊の心を惱ます我この面の皮一枚、生同生後の情誼をうけし恩人を煩はす我この面の皮一枚、さては身のため他のため、父母ましまさねば何をか憚らむ、浮世を捨てし今更ら何を

か惜しまむ、ましてや佛に捧げまつる淨辨が難行苦行の一端、聊か祖師の一見を乞ひ奉らむとて、左手に木像の裾の端しつかと握りつゝ、右手に抜き出したる鐵火を擱んで、春や春、まだ咲きも出でぬ苔の花の顔に我と我。おそろしや天生一氣の不敵さに會釋もなく、じゆつと音高く押し當てゝ焼き切るや否、流石に其のまゝ身を伏轉びしが我を忘れし悲鳴も出さず、たゞばつと立つ白き煙と共に血腥き匂ひは祖師の面をかすめて闇に染み渡りぬ、

諸宗の佛徒いづれはあれど、わけて禪僧の常習、朝は東天の鴉に先だちて起き出づる中にも、師の坊の淨眞和尚は星を戴いて七十の高齡に水を浴びつゝ、燈火をかゝけて祖師の前に一部の經文を誦する時には、まだ學寮の徒輩は窓さへ

開けぬに、かの淨辨じやうべんのこほふし小法師のみは必ず來りて背後うしろに坐しながら、師しの讀經よみかやうに連れてつ小聲こゑに念ねんずる殊勝しゆしやうさは、三月みつき越こしの今日けふまで更さらに絶たゆることなし。さるを今朝けふあしたにかぎりて其その姿すがたの見みえぬのみか、はや明け放はなれゆく白山はくさんの森もりに鴉からすの聲こゑ々々かしま喧かしく、學寮がくしやうの徒輩とほも起おき出いでて講堂かうだうに菓あままり、庫裡くらの方かたにも炊傲すゐはんの煙けむりさへ立ち昇のぼりつゝ、前夜ゆうべ一夜ひよを降ふり通とほせし雨う後の旭あすけつ日ひつなほさら軒のきに輝かいて射い入いれども、何なんとかしけむ淨辨じやうべんの姿すがたさらに見みえざれば、師しの坊ぼうそつと人ひとをして其その寢屋ねやを窺うかがはしむるに、頭上あたまより夜具やぐうちかぶりて丸まるく臥ふしながら、足音あしおとに人ひとの來きたりしを知しりけむ聲こゑのみ細ほそく振ふり立たてぬ。

「腹はらが痛いたいゝ、誰たれか知らぬが幸便さいひんの御依頼おたより、今日けふ一日いちにちの養生やうじやうを師しの坊ぼうに届まけて下くだされ、いや藥くすりは大おほい嫌きらひ、たとひ死しんでも御無用おんむじやう々々々々」

かくと聞きいたる師しの坊ぼう、おもはず笑わらを含こんで、いかに賢さかしくとも人ひとに秀ひいづるとも、流石さすがは十二じふにの子供こどもなり、腹はらが痛いたしとて顔かほも手足てあしも夜具やぐに包つんで打うち臥ふしながら、藥くすりは嫌いやぢや無用むじやう々々々々と叫さけぶところが可愛かほし、まこと堪たへ難がたき腹痛はらうづなれば、這はひ出いでても人ひとを呼よぶべく、また與あたへむとする藥くすりを嫌きらふべき筈はずなし、さては今日けふ一日いちにちの暇ひまを偷ぬすんで骨ほねを休やすませむとの心體しんてい、もし思おもひ出いして傳つたへきく父ちちや戀こひしき母ははや夢ゆめみむとの心こころならば猶なほ更さらら哀あはれなり、たゞそのまゝに捨すて置おけ捨すて置おけとて打うち過すぎしが、晝餐ひるけにも出いで來きらず、夜食やしよくの擧あげ析ききながらも起おき出いでぬ不思議ふしぎさに、またもや人ひとをして窺うかがはしむれば、熱火あつしひに對むかうて默然もくねんと坐ざせる淨辨じやうべんの後姿うしろすがた、嘘うそか眞實まことか何いづれにもせよ、一日いちにちも食くはず飲のまずに打うち勞つかれたる體てい、いはゞ雨あめに惱なめる花はなの色香いろかの一入ひとしほさらに美うらはしがるべしと思おもひの外ほか、振ふり返かへッ

たる顔音を一目みるや否、きやツと叫んで其のまゝ遁け出しぬ、  
 やれ淨辨が化けたぞ、いや化物が淨辨を喰ひ殺して其の姿に化けかゝったところを見届けた、化物ぢや、化物ぢや、いつれも出合へ〜と叫んだる體に、學寮よりも庫裡よりも一時に走り出でて、鐵如意を打ち振るやら棍棒を持ち出すやら、たゞがや〜と立騒ぎながら、かゝる時のみ俄に長幼の順を争うて我こそ先に進まぬといふものなければ、いづれも打ち揃うて諸共に押し出す契約を整へ、怖る〜廊下傳ひに行きかゝる前面より、はや立ち出でて力なげに歩み來る小法師の姿、ほんやりと此方の火影をうけて物凄くうつりぬ、  
 そりやこそ來をった油斷すなど、手燭を高く差上げて見れば、なるほど姿ばかりは淨辨ながら花の顔どこへやら、ぶつ〜と腐り果てたる瓜の如く満面膨れ

上りて目鼻も分かず紫色に血走つたる顔色を見るより、いづれも忽然あつと驚いて、總崩れに遁け出しぬ、

師の坊の淨眞和尚は、たゞ不思議とばかり、みづから燈火を探つて廊下口まで來かゝりしが、俄に多勢の遁け來るを冷笑ひながら、老の腰うち伸ばしもせず平生のまゝの體、さすがに顔色さへ變へず靜に歩み行けば、果して怪しの顔色、見るより皺枯れたれど聲は冴えて高し。

「淨辨か、さて何者ぞ」

淨の坊と知つて歩みを停めしが、聲かけられて忽ち其所に伏しりつ兩手を支へぬ、

「淨辨で御座りまする」

かはりもの

かはりもの

「その顔は、何とした」

「前夜、鐵火箸を焼いて押し當てました故」

「な、何の爲ぢや」

「これも修行の一端と心得まして」

「痛いか」

「たゞ夢のやうで、痒うも御座りませぬ」

淨真和尚かくと聞くや否、老の足踏み鳴らして、さながら小兒の如く廊下に躍りあがりつゝ、

「出来た〜、一山の満足、我ための傳燈、出来た〜」

かはりもの

敵と知れば鬼神も怖れぬ面魂に躍りあがって忽ち六尺の荒男を打ち斃す猛勢、わが顔の美しきを修行の障碍と思へば忽ち鐵火を取って満面を焼き切る振舞、そも〜これが十二の小腕になるべきことか、やがて年と共に觀念勤行の學徳を積まば行末いかなる名僧智識になるやらむ、流石は世に唄はれしほどの武士が種なりとて、きくもの見るもの、いづれも感歎の舌を巻いて驚きぬ、されど落仕再び梢に上らず、たゞ一夜の嵐を我から招いて、三春の紅顔いたづらに寒林寂寞の枯木となりし哀れさには、いづれも袖を絞りて泣かぬものなく、昨日まで煩惱の焰を焼いて争ひし十七人の學寮も、今日は忽ち無常迅速、情も戀も面の皮一重の脆き浮世を今更に悟りぬ、

いかに心は猛く氣は張り切つて屈せずとも、闇を貫く鐵火を取って會釋もなく

額際より頬を斜めに押し當てたれば、満面たゞ熟柿を踏み潰せしが如く膨れ上りて、しかも紫色に目鼻も分かす血走つたるのみか、焼け爛れたる皮肉の疼痛みしくと總身の骨に泌み渡りて、をりく眼も眩み息も絶ゆるかと思へども師の坊に問はれし時、たゞ夢のやうで痒うも御坐らぬと言ひ放ちし一言を、あくまで打ち通して守らむとする膽の太さに、じつと堪へて其のまゝ空を嘯く體、醫藥を勸むれども入らぬと答へて聞き入れず、養生を諭せど無用と答へて寢もせず、朝夕たゞ冷水を汲み上げて注ぎ洗ふのみなりしが、あはれ不思議や、天生これほどの不敵者には、元來これほどの大疵も然までに徹へざりけむ、およそ半月ばかりの後には焼け爛れたる一皮づつを次第に剥ぎ取るが如く、はや一月の後ともなりし頃には満面を披うたるに等しく、うまれついたる玉は玉、花

の顔いつしか舊の色香に返りて雪を欺く目鼻只許、たゞ鐵火の痕のみ赤く際立ちて眞向より右の頬を斜めた傷つけたる一條の無残さ、さながら名筆の畫に誤つて朱を引けるが如し、

淨辦が鐵火をもて其の面を焼き切りしと聞くや否、かの田原采女は忽ち駈け附けて其の顔じつと打ち守りしのみ、たゞ眼中に涙を含んで物も得言はず、別に何事か師の坊と私語いて立ち去りしが、このごろ満面拭ふが如く癒えたりと聞いて再び出で來りつゝ、一室に呼び入れて膝を突き合せながら懇に諭しぬ、  
「かねて言ひ聞かせし通り、父の左近が最後に人しれず頼まれし一言の手前、されば生れぬ前より我子と思ひしほどぢやもの、あやまつて母をさへ手にかけてずば、女子たゞ一人にて幸ひ我に男の子はなし、あのまゝ引取つて父子の契約、



かはりもの

天晴れ一流の武士にもすべき筈ながら、公儀の御用を勤むる身として聊か憚りあるのみか、思へば十二年の生前最後の一切よくよく佛縁に深きものと諦めて、當寺に入れしより既に四月越師の坊も行末は名僧になるべき前兆ありとて、これこれ大切に思はるゝ身を軽々しく今度の事、そもく何と心得てぢや、師の坊が廊下に躍りあがって出来た、一山の傳燈この小僧にありと叫ばれたは、いかに不敵の性根ありとはいへ今年やうく十二の顔面、忽然あれほどの大疵、はつと氣を落さしては一身の大事にも及ばむかと、殊更に響あて言はれた芳志ぢやぞ、その美顔を修行の障碍とは餘所よりの批判、その身の觀念さへ確乎ならば何の障碍になるべき、人が氣遣ふほど其の面いよく磨いて花に錦を添へながら一心いよく確く守つてこそ、まことの太勇ともいふべきに、立聞き

かはりもの

の一言一句に身を驚かして天生を損ふこと、却つて臆病の仕業ぞよ、されば此の後、當寺の門を一步たりとも外に出でては在俗の我に萬事を問へ、この門を一步たりとも出でざるうちは一向專念に師の坊の教訓を守りて、たとひ如何なる事ありとも身勝手手の振舞ひ固く無用」

いひつゝ見れば剃り圓めたる青黛の頭を疊について雪より眞白き兩手を重ねつゝ、身を縮めて無言に恐れ入つたる殊勝の體、やうやう額越た見上ぐる玉の顔に無残や朱を引けるが如き鐵火の痕田原采女おもはず兩眼の涙を膝上に落しながら、あはれ父の左近が生きて今この有様を見れば何とか言ふ。

春や春、秋や秋、眠前みる寺門の内外に櫻と桐の有無盛衰、幾度か吹き匂ひ散

かはりもの

り失せて五年を経しかば、淨辨じやうべんのこ法師ほふしも其そのののち後のちいつまでのこ法師ほふしならで、は  
や十七あづきのあづき曉あきもし世よにある男をとこならば今いまをま前ま盛さかりの花はなの山やま、色いろ香かも深ふかき寛くわん活くわ伊い達だつ  
の若わか衆しゆうなれど、色しき即そく是ぜ空くうに身みを寄よする修しゆ行ぎやう者しやとて、袖そでみじかき手て織おりの白びやく衣えに麻あさ  
の衣ころもを著つけたる姿すがた、しかも鐵てつ火くわの痕あとは今いまも猶なほありノと際きはだ立ちて、惜をしや藤ふじた  
けたる玉たまの顔かほに照てり添そふ風ふう情じやう、何なんとやら絶ぜつ世せいの美び人じんが血ちに染そみし白やい刃はを含かくめる  
如ごとき心こころ地ぢして物もの凄すこし、

しかも天てん生せいの才さい氣きに禪ぜん家け第だい一の動どうせぬ膽だん魂たまを取とり添そへて、朝あさ夕ゆふたえす五いつ年ごの觀くわん  
念ねん修しゆ行ぎやうを積つみしかば、多た年ねんの道みちを先まだちて歩あゆみし七しち人じんの學がく察さつも今いまは一いつ喝かつの下もと  
に屈くつせられて舌したを卷まき、もし襲おそひ來くるる雲うん水すいの敵てきあらば忽たちち出いで對むかう言ごん下かに追お  
ひ拂はらふのみか、をりく師しの坊ぼうさへ不ふ意いの問もん答たふに衣ころもの隙すき間まを規わらはるゝほどの體てい、

さらぬも十二じふにの小こ腕うでに大だいの曲くま者ものを討うつて其そのののち後のちまた鐵てつ火くわに我わが面めんを燒やき切きつたる  
振ふる舞まい、きけば怖おそろしの荒あ法はふ師しとて見みれば思おもひの外ほかなる花はなの顔かほいよく高たかく世よに  
聞きえて祥じやう雲うん寺じの淨じやう辨べんといへば、そのこの禪ぜん窟くつの飛ひ龍りゆうとぞ囃はやされぬ、

まことや父ちちは伊い達だつ振ふる子ことて十六じふろくの春はるより武ぶ士しの風かぜ上がうに置おかれ世せ上じやうの小こ唄うたに唄うたは  
れ、今いまその子こは十二じふにの曉あかつきより不ふ敵てきの名なを世よに傳つたへて十七じふしちの秋あきには禪ぜん窟くつの飛ひ龍りゆうと  
囃はやされつゝ、小こ石いし川がはに祥じやう雲うん寺じあることを知しらざる人ひとはあれど、今いまこの江こ戸ごに淨じやう  
辨べんあるを知しらぬ者ものなきに至いたりぬ、

一日いちにちの夕ゆふ暮くれ、淨じやう辨べんたゞ一人ひとり、寺てら門もんの柱はしらに身みを倚よせて何なに心こころなく往おもて  
をりしも四十しじゆばかりの女をんなの袖そで乞こ、まだ老おいて叶かなはぬ年としにはあらぬに、良よ人ひともな  
きか子こもなきか如何いかなる仔し細さいあつて浮う世よに捨すてられしぞ、しかも片かた目めを煩わづらひけ

かはりもの

かはりもの

む襦袢の袖もて蔽ひながら、飢餓に勞れし片手の杖を力に蟲の這ふが如く、覺束なけの脚下やうく道を通りて來かゝる風情、淨辨みるより思はず涙を浮べて、あはれ餘所事ならず我も昔は同じ境涯、南無阿彌陀佛、もし生きて在せば母と等しき年輩、いかに他人の成る果と見過すべき、せめては今夜の我が食分を其のまゝに進ぜむとて、庫裡の方に走せ入りつゝ自己が夜食の一餐を携へて再び門前に馳せ出づれば、や、今の袖乞は大地に伏し轉んで悲鳴をあけながら、その傍らを過ぎし槍一筋と一挺の乗物に後れし若黨一人、なほも大聲に罵り叫ぶや否、また忽ち足をあけて後ろざまに蹴飛ばせば、ころくんと鞠の如く跳ね飛ばされて溝石に瘦せたる皮と骨との額を打ちけむ、さつと破れて黒血を流しぬ、

かはりもの

淨辨かくと見るより我を忘れて走せ行きつゝ、抱き起して介抱しながら、あの大凡下俗の奴めと呟きし聲、おもひの外に高かりけむ、かの若黨の耳に入りて忽ち取つて返せしを見れば、黒羽織に兩股立の毛脛ぬつと現はしたる撥鬚の大男、當時流行の角鰐無反の大小いかめしく、逆立つ肩に兩眼くわつと見開いて仁王の如く突つ立ちぬ、

「この賣僧め、今、何と吐した」

叫びし聲に七八間も行き爲ぎし槍一筋と乗物一挺、もろともに立止まりしかば若黨いよく勢ひを得て聲張り上げつゝ、

「歴々の御駕先、恐れ入つて路傍に這ひ寄るべきを、見苦しい分際で横ぎつたがためぢや、手討にすべき賤女なれど、刃の汚辱と生命そまのゝ助け置いたを

かはりもの

冥加とも思はず、足にかけて蹴飛ばしたは何とした、じたい汝また何の因縁あつて今の一言を昏いた、頭陀袋の破れ法師め、二の句を次がば蹴殺すぞよ、蹴殺す前の脛ためし、その力鹽梅まづこれ喰へッ」

いふや否、片足あけて袖乞の介抱に打ち屈める淨辨の脛骨ぐツと蹴りぬ、蹴られて思はず臀居に仆れながら、起きもやらで其のまゝの額越に睨み上げたる物凄さ、越路の雪を欺く眞白の面體に、此頃やうやう薄らぎし鐵火の痕、ばツと俄に赤く際立ちぬ、

「この法師まで、お蹴りめされたな、但し御自慢の脛力、それが精一ばいで御坐るか」

かはりもの

天下の往來、この大道に槍一筋と駕一挺、よしや横へに進むともなほ左右に廣き空地のあるべきを、まして七八人の同勢が縦に並んで歩む一重の行列に女袖乞の一人が何の障碍になるべき、されば虎の威をかる野狐とやら、そのまた狐をいたゞく土鼠の奴どもかゝる振舞、何事ぞ六の毛脛をあけて弱り果てたるものを蹴るさへ危きに、なほ飽き足らで二度目の後ろ足に蹴飛ばしたるのみか、これを助けむとて介抱せし僧侶の我までを立ち返つて土足にかけたる奴、おのれ、そのまゝにはと思ひしが、敵手は在俗の兩刀、我は浮世の外なる五戒十戒の身、たゞ眼前の疵を負うたる袖乞こそ哀れなれと、一旦の憤怒を押へて其のまゝ又もや無言に介抱せむとする後方より、稻妻の如く我が脊骨を突き損ねて肩口を迂りつゝ胸前に落ち來る槍の石突、淨辨はツと思はず搦んで振り返りな

から、

かはりもの

「こりや何とせらるゝ、今の若黨殿ばかりか、槍持の奴衆まで立ち戻つての御無體、しかも石突にて」

「やア青坊主め、天下の歴々が、格式に立つ槍の石突を搦むとは」

「御免なりませ、搦まずば脊骨が折れまする、もとより世を捨てた出家の身なれば、貴方衆がためには捨て兼ねる一命、たゞの佛徒と見違うて慮外めさるな、喝と叫ぶや否、力を極めて搦みし槍の石突を後ろさまに跳ね上ぐれば、不意をうたれし奴は其のまゝ、槍を抱へて眞ッ逆さまに仆れぬ、

奴の仆るゝと共に若黨怒つて躍りかゝらむとする寸暇もなく、かの袖乞を横に搔い抱けるまゝ飛鳥の如く門内へ走せ入れば、つゞいて追ひ込む二人の味方を

助けむとて、止まりし駕脇の三人、またもや一散に聲を揃へて追ひ込みぬ、

平生は山嶽おし崩るゝとも更に動ぜざる淨辨ながら、いざといへば身も心も風の舞ふが如き淨辨、さつと庫裡に躍り入つて袖乞を物陰に隠すや否、忽ち取つて返して門内の廣庭に走り出でつゝ、横の大木を背後の楯に取り大手を擴けて立塞がりながら、梵音に馴れたる大音聲、

「參禪參佛とも見えざる在俗の身を以て、何事ぞ土砂を蹴立てて當寺に踏ん込む體、したゝかの狼藉で御坐るぞ、もしそれほどの儀ならば寺社奉行まで御届けあるべき筈、狼狽へて後悔めさるな、これは無量院祥雲寺の學寮に罷り在る淨辨と申するもの、たゞし一喝の鐵如意にて聊か興味を添へまるらさうか」  
たとひ熱湯に投じて煮らるゝとも莞爾と笑を含んで喫すべきほどの淨辨が、大

かはりもの

かはりもの

の字となつて五人の武家男を物の數にも心得ざるのみか、寺格寺法を叫んで眞正面より名乗りあけたる理の當然に、いづれも主を持つ身の今更、互に顔を見合はせつゝ躊躇ふ折しも、門前に駕を乗り捨て、入り來りしは年輩三十前後の血氣に満ちたる大男、奴が持てる槍を取つて淨辨が顔じつと睨みながら、

「祥雲寺に生白き其の面の赤疵。さては噂に聞き及ぶ淨辨とやら、まだ殻を這ひ出ぬ少僧ながら随分おもしろい、寺格寺法は後日の事、今この眼前に穂鞘のまゝ叩き伏せてくれうか、かくいふは永田馬場の一番手に立てらるゝ林兵部ぢや」

「や、これは主人の殿か、さりとては輕々しう見えまするぞ、御家來衆の不法も辨へずして青道心の拙僧たゞ一人に主従多勢の御勢ひ、もし寺格寺法を後日

の沙汰と思召さば、今この眼前の得物に穂鞘のまゝとは、御手許ばかり御遠慮すぎたり、かつまた槍は突くものと聞き及ぶに叩き伏せむとは近來の珍説、御身分納にも似合はぬ仰せ、いざ潔く鞘を走らして來ませ、さすがに鑄附では御坐るまい、佛飯殘餘の粥腹で修行いたした禪僧の骨節に、天下れきくの拔身の槍味とは案外の御馳走」

から／＼と笑ひ喝と叫んで身を蹴しつゝ、今まで脊にせる槓の大木を忽ち眼前の小楯に取つて衣の袖に隠せし鐵如意、草叢より飛び出でたる蛇の如くに現はしぬ。

『まるらるゝは、但し、まるらうか』

かはりもの

かはりもの

永田馬場の一番手とはいはるゝ林兵部は食祿七千石の大旗本、しかも當の主人は音に聞えたる武者ごのみとて、三百俵以下の御家人より數十人の荒男を選んで、自己が家來の如くに平生の恩を賣り心を取りつゝ、家の紋所そのまま桔梗組と唱へて江戸中を横行するの勢ひ、何を目的に誰を敵手と定めねど、もし前に立たば國司大名にも物いはせまじき、廣言に、いづれも眉を擧めて目を敵つゝ、かつて其の門前の落首にも、どん／＼と四邊かまはぬはやしたて太鼓の皮の破れかぶれに、

これほどの林兵部、もし敵が天晴の武士ならば七千石の身代を賭けても飛び込むべき男ながら、高が二十歳に足らぬ青坊主たゞ一人、しかも穂鞘のまゝ叩き伏せて立ち去らむとすれば、手ぬるし手ぬるし抜き連れて主従もろともに來れとせしふ、されど林兵部ともいはるゝほどの武夫が、如何なる仔細あればとて、わづか取るにも足らぬ小僧一人に主従八人が何と白刃を連ねて向はるべきや、もし萬に一つも誤つて石に躓き一滴の血でも残しなば、それこそ多年の名折れ世上の物笑ひ、且は取つて返らぬ不覺の基、さりとて此のまゝ打ち捨て退きもならねば、進退こゝに谷つて如何はせむと思ふ折しも、立ち騒ぐ聲きつけいで來りし住職の老僧が言葉を謝せしを僥倖、あらむかぎりの廣言吐き散らして其場を引き揚げしが、折もあれかし時もあれかし、あの淨辨といふ青坊主め、仕損じても恥づかしからぬ彼奴に分相應の奴を差向けて、いつの日か一捻りに捻り潰してくれむとぞ覘ひぬ、

林兵部が主従の立ち去りし後、淨辨は庫裡に隠せし彼の袖乞を師の坊の面前に

かはりもの

かはりもの

連れ出して、具さに仔細を打ち語れば、師の坊しづかに首肯いて其の芳志を賞しながら其の行爲の殺氣を深く戒めつゝ、飄然として方丈に立ち歸らむとせしが忽ち振り返つて』

『いかに淨辨、いつぞや田原殿が言葉を忘れたか、門外の事ならば我に問へ、門内の事ならば師に問へとの一言、さるを今日の振舞、そもく返答あるか憚らず言へ』

聲に應じて淨辨、ぬツと頭をあけつゝ更に淀まぬ體、

『今日の事は門内門外に起りし儀ならず、實は内外の境目、闕際にて一片の慈悲より』

きくや否、師の坊からくと笑うて其のまゝ立ち去る後影を見送りながら、蹴

飛ばされて磨り削いたる袖乞が額の疵を包み、おのが今夜の食分を與へ、なほも十七人の學寮を説き廻りて幾何づつの施與を乞ひ集めつゝ、さまんゝに勞はり慰めて門外に送り出でしが、はや日は暮れたり、黄昏の宵闇に幾度か我を振り返りて伏し拜みながらに立ち去りし體、淨辨おもはず涙を浮べて其のまゝ其所を立ちしが、本堂に聞ゆる梵音の響きに促されて、何心なく門内に入らむとすれば、師の坊いつしか來つて俄に問ひかけぬ、

『門の闕に内と外との隔てなし、あれば名ばかり、さるを内外の境目とは何所ぢや』

淨辨はツと驚いて躊躇へば、薄闇の中より一喝の鐵如意さつと躍り來つて肩口を叩かれぬ

かはりもの



かはりもの

『ついでに、打つと打たれざる境目も工夫せい』

おもひもよらぬ林主従と争うてより、この祥雲寺へ信心の佛參とも見ざる浪人風の編笠一人、日毎に來りて門の内外を見廻しながら彼方前方に徘徊ひつゝ何をか窺ふ體、いかにも怪しきのみか、風の朝は猶更ら早く來り雨の夕は一入遅く立ち去る風情、あまりの不思議さに人をして問はしむれば、いや別に用なし、但し寺法として皆いち／＼名を問ふか乃至また出入無用なるかといふ、面は笠に包んで見えねども聲は正しく一癖あるべき男なり、さては先日返報、歴々の武士にも似合はず執念ぶかき林よりの曲物ぞ、青法師たゞ一人を敵に取つての不足さに自己みづから手を下さず、仕損じても恥づかしからぬ分相應の男を

差向けて事を好むに極つたり、されど張る弓も久しければ竟に弛んで用をなさざるの道理、たゞ靜に當らず觸らず捨て置けくといふ師の坊が言葉を守りて一山いづれも淨辨を深く方丈の奥に隠しつゝ、さらに姿の見えざるやう心を配れば、かの編笠をり／＼庫裡の力に入り來りて、寺男に鳥目を與へながら馴れ馴れしけに言葉を交して湯茶を乞ひ、果は堪へ兼ねてや、當寺の學寮に淨辨といふ白い若僧ある筈、そと呼んでくれまいかと打ち出しぬ。

そりやこそ本音を吐いたぞ、もはや叶はぬ元來が生命しらすの喧嘩を押賣りに來りし奴、あの兩刀をひねくつて編笠跳ね飛ばすや否、いつ何時いかなる事を仕出來すやらむ、ぬツと理はれたる手足の太さに臆の太さも嘸やと思はるゝ、さす敵の淨辨に見當らぬ腹立ちまぎれ、誰彼なしの狼藉せられては一山の血の

かはりもの

かはりもの

雨ぢや、油断して側杖たるゝなと俄に縮みあがりし體を、淨辨つらく見もし聞きもして思ふやう、およそ物の恐ろしいふは佛徒にない筈、まして禪家の修行に何者の鐵壁があるべき、さるを凡俗の下司たゞ一人に驚いて一山の顔色を失ふこと、如何にしても笑止千萬、いでや我みづから立ち出でて言下に喝破しくれむ、もし手足を働かさば、おのれ其分に差置くべきや、骨を粉にして祖師への抹香に灶かむとて、例の鐵如意を衣の袖に押し隠しなから、そろそろ奥より庫裡の方へ立ち出でむとする勢ひに、いづれも呆れ驚いて前後を遮りつゝ、すはや一大事、かくと師の坊に告げぬ、

さてこそ、また例の膽魂ゆらくと動き始めたりと、そのまゝ淨辨を呼び寄せて雪の肩を擧めながら、

かはりもの

「あの編笠に假令どれほどの猛火を包むとも、水の事、水の事、たゞ靜に冷かに清く澄んで水のまゝなれと言ひ聞かせたを淨辨、いかに何と心得たぞ、燃ゆる火の油も薪も竟に盡きて炎焔は消ゆべき筈のものぢや、さるを我から油を運び薪を添へむとの振舞、凡流の愚にも如かさるぞ」

「はッ、師の仰せに御座りますれど、淨辨たゞ一人の事より一山の衆を驚かして觀念修行の障碍となるばかりか、もし萬一の大事に及ばむかと」

「いや〜一山は一體、まことの火を逢うて一朝の灰となる曉は何とぢや。」

「それは師の坊たゞ御一人の事、いまだ徹底なき學寮を始めとして一山の眼中には、眼前あの編笠と眼前この淨辨との一刹那を恐るゝ體、つまるところ兒戯に大人の御沙汰は暫らく御無用に願ひまする。根ふものと視はるゝものとの理

かはりもの

放るればこそ衝き、衝けばこそ放るゝかと存じまする」

「さらばよし、なれど敵手が俗ぢや、あの編笠に舩らぬやう、そと川原殿まで駆け込んで萬事を問へ、門内の恐懼を救はむとすれば、門外の事、門外のこ」と

前夜のうちに師の坊の許可をうけて、例の編笠まだ見えぬ東大のころ、怖れて脱け出すにあらねども一山の心遣ひ、そつと人しれず寺門を立ち出で、あけ放れゆく鴉の聲と共に番町の川原家を訪はむとせしが、そもく十二の年に救はれて一度その邸宅に連れ行かれしまゝ、祥雲寺に身を寄せて五年の間、さらに我より訪ふべき俗用なければ、たゞ臚けの夢心地に知るのみ、あらたに聞き及

びし道筋を辿り辿りて歩みしが、いつしか迷うて名も得知らぬ廣き屋敷町へ出でぬ、

をりしも來かゝる人に對うて問へば、これこそ永田馬場、それ、その角屋敷が音に響いた林殿ちやとて、入らざる事まで教へて去りぬ、

淨辨はツと思はず振り返つて見れば、いかめしき門構へに建て聯ねたる總長屋の武者窓、遙に見渡す大立關内女關、さては書院の高棟、近くは聞ゆる厩の嘶きに一入の威儀を備へて、さすがに旗本の上乗こゝの主人が笑止千萬あの狼狽者かと、我を忘れて冷笑ひつゝ、停む折しも、門内より躍り出でたる飼犬の勢ひさながら今にも喰ひつくかと思ふばかりに吠え立てぬ、

主が主なれば畜生おのれまでが善惡無差別の空吠え空膽、まことの曲者に出逢

かはりもの

はゞ尾を巻いて遁け出すべしと、尻目にかけてながら半町あまり行き過ぎしが、いや待て暫時、あの林兵部といふ奴、この町名を問へば、問はざる其の名までも人はいはるゝほどの威勢、又あれほどの大屋敷を我物として門前に塵も置かざる威勢、さては思ひしより案外の大敵ぞ、うかく恩人の田原殿を煩はして火の手を横に擴けなば不覺の上の不覺なり、さりとて此のまゝ寺に歸らば執念ふかき例の編笠、師の坊は兎も角も一山の秋肩を眼前に解ぐべき術なし、は何としてくれむ、いづれの道を行くにも荆棘の境目、南無佛と唱へて我みづから我を責め問ひながら、木像の如くに立ッて兩眼を閉ぢしが一念の答案、くわツと開くや否、忽ち身を翻して大跨に取ッて返しつゝ、さらに何の會釋もなく我家の寢床に歸るかと思はるゝ體、すつと門内に進み入り、大立關の中央に對

うて馴れたる梵音いと高し、

「おたのみ申す、お取次の衆、たのみまするぞ」

をりしも主人の林兵部は、昨夜の酒氣いまだ失せざれど、組の事とて早朝より訪ひ來し配下の六七人を招き入れつゝ、果は興に乗じて頻りに何をか談笑せしが取次の者いで來りて、眉を擧めながら、

「只今お立關へ七七八の僧侶一人、これは小石川祥雲寺の學寮にて淨辨と申すもの、憚りながら是非に御意を得たし、もし御忘れも御座らうが、なほ念のため申し上ぐれば、先日、ふとせし事より御馴染に相成りし青坊主と仰せ下さらば、直ちに御會得あるべき筈と、かやうに申し居りまする」

きくや否、流石に兵部も、二日酔の面體さつと一時に醒め果て、かどやく兩

かはりもの

眼ぎろく光らせながら、おもはず膝を進めぬ。

「年ごろ十七八、色白の美僧で面體に朱を引けるが如き大疵のある奴、む、  
儲は逆寄せに來をツたな、これは案外、おもひの外の曲物ぢや、なるほど、聞き  
及んだ不敵ものぢやぞ、されどよし、そのまゝ案内せい、すつと通せ、書院の  
片廊下より通せ」

さしもの兵部なれど、よく思ひの外なる道具外れを打たれし心地やしけむ、  
取次の立ち去りし後に猶ほ兩腕を組んで無言のまま頻りに思案の體なりしが、  
はつと心附いて聲を潜めつゝ、何をか配下の六人に私語きぬ、

虎穴に入つて探るべき虎子はなけれど、いたづらに遠く懸け隔てて敵の氣焰を

高めむよりは、燃ゆる火元に踏ん込んで水を注ぎし後、残る餘煙を靜に打ち消  
しくれむとて、眞一文字に勁敵の懐中へ飛び込んだる振舞、さながら無用の死  
骨を抛け出したる鐵田牛皮の荒法師に似たれども、これぞ却つて死中に活を求  
むる禪味の一喝、おもむろに襟を搔き合せ衣の袖を整へながら、案内に引れて  
奥ふかく書院の片廊下を傳ひつゝ、これぞ主人の入室といはるゝ此方に坐しぬ。

「只今、取次衆に申し上りました小石川祥雲寺の學寮淨辨、罷り出でました」  
さつと襖を開け放てば、正面の床柱に背を持たせながら膝を重ねて坐したるは  
林兵部鬢、鬢の毛ぢよみて大額の赤ら面に物を許さぬ兩眼の瞳子、その左右に  
は六七人の武士、いづれも一癖あるべき肩胛を怒らして、いざといはゞ主人に  
手は下させまじき面魂、いづれも等しう冷かなる微笑を浮べて此方を見下しぬ

かはりもの

主人の兵部、わざと聲やさしう、しづかに坐上を指さしながら、

「や、よくまるツた、いざ進め、そのまゝく、すツと近う」

聲もろとも更に會釋なき淨辨、するくくと座を進んで主人が膝に近く差寄りつゝ見返れば、左右に居並びし六人の武士、却つて我が末座にあるか如し、

「これは御免なりませ、在俗の禮儀に疎き身で御座りますれば」

主人の兵部いよく目を欬て、淨辨が顔じツと見詰めながら、

「在俗の禮儀に疎き身が、在俗の我等に何の用ぢや」

「身のほども辨へずして推參の儀、恐れ入りますれど、何と致さう、伺はいでは濟まぬ子細、つまるところは、御謝罪のため」

「む、謝罪のためとは、先日の事に就いてか」

「いや、先日の事は、憚りながら全く以て淨辨の道理至極、いちく、貴方様御家來衆の不法千萬より起りしこと、假令どれほどの御大身にせよ、さらに御謝罪いたさう筈は御座りませねど」

「む、さらば何の謝罪にまるツた」

「たゞ一切の煩惱を去るべき圓頂黒衣の身として、天下歴々の貴方様主従を眼前の敵に引き受け、あはれ面白や一勝負いたさむと存せし一事のみ。何とも以て申譯のない次第と心得、その御謝罪に罷り出でましたる淨辨、もし御海容を蒙らば、ついでに更めて御依頼の一儀を願はむがため」

「はて小賢しく異な事をいふ坊主ぢや、先日の事、おのれ悪しと思はじ、一切どこまでも素頭を叩いて恐れ入るべき筈なるに、身勝手の詮議立して言葉の端

かはりもの

かほりもの

に針の折目を含む體、いはば物の道理に勝てど事の敵手に負けてやると申すのか、今一應しかと、更めて言へ」

くわツと怒ツて思はず膝を乗り出せば、左右に居並ぶ六人も我を忘れて詰め寄るが如く、この青坊主め、うかくと此上なはも舌を動かさば忽ち細首捻ぢ伏せて血嘔吐を吐かしくれむとの勢ひに、顔色を失うて縮み上るかと思ひの外の淨辨坊、いづこを、風が吹くやらと靜に微笑を浮べて四邊を見廻しながら、

「いかにも御言葉の通り、ものゝ道理には勝ちましたれど、ことの敵手に負けて出ましたる淨辨」

「や、たしかに聞いたぞ、その褒美は後刻あらためて呉れる、さて今一事、我等に對うて依頼とは」

「餘の儀で御座りませぬ、近來、祥雲寺の境内へ編笠に面を包みし浪人風の男、雨にも風にも日毎にまるツて何とやら物を覘ふが如く、をりく人斬庖丁の柄を捻くツて笠越に敵手ほしさうなる體、いかにも奇怪の奴、ひッ捕へて詮議の上、もし怪しくば一蹴り蹴飛ばして腰骨うち抜くほどの目に物みせてくれむとは存じますれど、今日かく後悔いたして御謝罪に罷り出まする淨辨、もはや先日、事の懲りて一切の荒々しき振舞は禁物の手前、何とも以て難儀至極に存じまする、ついでには恐れながら、もし御常家に御不用の生命一個、仕損じても恥づかしからぬ彼奴に分相應の御家來一人御坐りますれば、是非に借用申したき御願ひ、はゝゝゝ」

いひつゝ額越に主人の顔を見れば、憤怒と驚愕とに滿面朱を注げるが如し、さ

かほりもの

かはりもの

れど態と言葉を静めて左右を見返りながら、

「いづれも何と思はるゝ、さしあたって、この青坊主に遣るべき褒美の品は、はて何に致さうやら」

淨辨が寺を立ち出でしは今朝の東天ごろ、されば小石川より番町への道程、いかに遠しとはいへ馴れざるとはいへ、はや晝までには歸るべき筈、さては例の編笠に心を置いて夕暮の薄闇は立ち戻るかと待てども待てども其の日の夜に入りてさへ歸らねば、師の坊を始めとして一山いづれも眉を擧めつゝ、あれほどの物堅き田原殿、まして今日かの淨辨より委細を聞かれし上は猶更の事、もし一泊と定まらば、そのよし必ず告げ來らるべきに、何の音便もなきは怪しとて、

俄に寺男を走らしつゝ問へば、彼方も驚いて更に來らずとの返答に、いよく此方は驚いて立ち騒ぎぬ、

その夜の明くるや否、師の坊より訪はむとて駕に乗りかゝりし折しも、田原采女は馬に鞭つて馳せ來りしかば、もろともに打ち連れて方丈の奥に伴ひつゝ、こゝに始めて先日せんじつの委細ゐさいを聞きし采女うねめおもはず眉まゆを擧めながら、

「さて、一度ならず二度ならず、無用の魂膽を張り切る淨辨ちや、その林といふは元來の勘けたる男、しかも七千石の高取とて、おのれが配下の徒輩を集めて桔梗組と稱へ、誰彼なしの敵に取つて鼻たかゝと武者振ひする奴、そのまゝに打ち捨て置いては如何なる大事にならうも知れぬのみか、第一あの淨辨が不敵さ猶更ら以て危しく、さては師の坊を始め、一山の愁眉を開かむた

かはりもの



かはりもの

め、また恩ある我に思はぬ飛沫のかゝらざるため、敵の林が手許へ其の身を投げ込んだに相違なし、されど林も一癖あるもの、うかく狼狽へてみだりに手を下すまい、たゞ、無事に其のまゝ淨辨を止め置いて自然に師の坊を引き出すか但しは火の手を擴げて當寺の一山を傾けむとするか、いづれ尋常では濟まぬこと、はて何としてくれう』

『なるほど、承れば随分、むづかしの敵手、わけてそれほど腹黒の武家とあれば猶更こゝは何とも以て御迷惑ながら』

『いや、申さるゝまでもないこと、たとひ如何なる次第ありとも、かゝる、底深き俗事に軽々しう師の坊の動かるゝ場でなし、武士は武士同士、幸ひ我等これより馳せ向うて、無事に淨辨を取返すべき工夫專一、さまで親しからねど林』

とは一二度も會合せし間柄、まさかに他の者よりは』

『何卒、無事に頼みまゐらす、元來あの淨辨も過ぎて及ばざるの過失、まだ丹田に落ち附かぬ血氣の勇を義に走りしたため、御座れば』

『はゝゝゝそれは拙者より申すべき事ぢや、兎も角も遅れては萬事の不覺、さてはまた、日毎に来る其の編笠とやら、今日も寺内に見えまするか、もし居らば先づ其奴を捉へて問ふべき仔細』

『いやゝ前夜、淨辨が歸山いたさぬためか、今日は其の編笠も見えざることのこと』

『さては前後の符合、いよく推量に違はず、委細は後刻のこと』  
いひつゝ座を起つて師の坊に送られながら、玄關に立ち出でて持てる太刀を横

かはりもの

かはりもの

たへつゝ、馬ひけ、馬ひけと叫ぶ折しも、武家の若黨めいたる男兩人、入り来りて、あやしげに田原采女を見遣りながら、

「これは永田馬場の林兵部よりまるツた使者で御座る、當山の學寮に淨辨と申すもの、聊か留め置くべき仔細あつて邸宅に留め置きますれば、念のため此段しかと御通知せ申す、また歸山いたさせたくば住職みづから参られてちぎく主人と談合なされたし」

いひつゝ立去むとするを見るより、田原采女思はず呼止て袴の綾を正しながら、「お使ひ御苦勞千萬、實は其事に就いて只今より推参いたさうと存じたところ、當寺の住職ちとばかり風邪のため、名代として俗縁の田原采女まかり出ますると御返事下されたい、不肖ながら拙者姓名は兼てより御存じあるべき筈ぢや、

但しこのまゝ御同道申さうか」

田原采女といふ騎馬の武士、祥雲寺の和尚が俗縁とて只今これへ推参の筈、をりしも立關へ立ち出でしところなりしとの返事を、林兵部きくより思はず肩を擧めて小首を傾けしが、はたと膝を打つて、や、面白い、かの青坊主たゞ一人を喰ひ足らで師の坊を呼び出さむとせしに、これは案外の敵手、老耄れたる古坊主よりは一段の興味、しかもその田原めは舊松平伊豆守が家來なりしを、公儀の鑑定に叶うて旗本に抜き出されしほどの男、聊か喧嘩の手敵へあるべしとて衣服をあらため書院を開け放ちて、今かくと待ち受けぬ

田原采女は馬上、かの使者に來りし兩若黨は徒歩なり、追ひ越して不意に押し

かはりもの

かはりもの

懸けむよりは、具さに返答させたる上、ゆるく罷り向はむとて、わざと其のまゝ再び方丈に入りつゝ、師の坊が手前の抹茶に思ふほどの時をうつせし後、鞍壺に跨り蹄を鳴らして祥雲寺を立ち出でぬ、  
 永田馬場なる林兵部が玄關に馬の嘶く聲、忽ち其人と知りて取次のもの迎へ出でつゝ、田原様ならば主人先刻よりの待ち兼ね、いざ其のまゝ直ちに御案内いたさうとの口上、采女おもはず微笑を浮べて、これはく行届いたる事かな、流石に先刻お使者の甲斐ありと呟きながら、ずつと打ち通りぬ、  
 築山泉水の犬庭に對うて障子を明け放ちたる書院の中央に、主人の林兵部、客の田原采女、おのゝ小刀ばかりを横たへて時候の挨拶も済みし後、さて更めて見交す顔と顔、

「これは田原殿、思ひも寄らぬ事にて御意を得まする、あの祥雲寺の和尚に俗縁あらせらるゝとやら」

「されば今日の御使者、和尚早速にも參上いたすべき筈のところ、生憎前夜より風邪の心地と申し、また世外の老衰と申し、殆ど迷惑の折柄、幸ひ拙者、その座に居合はせて斯く名代を仕る、承れば學寮淨辨に何か仔細あつて御當家に御留め置きなさるゝよし、じたい如何やうの次第で御座る」

「御名代から一入の満足に存じまするぢや、まづその仔細と申すは先日、祥雲寺の門前通行の砌、かの淨辨と拙者家來と何か爭論いたせしが基因、もし尋常の者ならば、仔細は儲置き、我等が一流、その場に斬捨も致さう筈なれど、かりにも僧侶と其まゝ無事に捨て置いたを、かの青坊主め何と心得てか、きのふ我

かはりもの

等が邸宅へ不意に押し掛けまるつて猶も雑言を吐き散らす體、狂氣ならずば若輩小僧の彼が一存であるまじく、これは必定、みだりに寺格寺法を楯に取る當時の悪風、かの一山の賣僧どもが蔭より絲を曳くと存じた故、ともかくも其の絲の引手が現はれ出づるまで、あの淨辨は拙者がための生證文生手形、たとひ反故になるとも容易くは波すまじき心底、無理と思召さるゝか、第一かゝる生小僧の分際ですら恐れ氣もなく天下の直參に對うて喧嘩の再舉に押し掛けしと聞かば、さらぬも圖に乗る世間の賣僧ども、これを手本に如何なる無禮を仕出來すやら、武家の威儀にも關すべき事で御座る』

『なるほど 段々お道理至極の仰せ、さらに一言も御座らぬが、何を申すも二十歳に足らぬ生修業の青坊主、いはゞ心なき愚物が時と場合も知らずに高笑ひ致すと同然、もとより御身分柄に關はるべきほどの奴でもなければ、たゞ呵しき者と思召して、その餘の萬事を儲置き、この田原采女に下されまじきや』  
 『外ならぬ御人が折角の御扱ひなれど、只今も申せし通りの次第、聊か進ぜかねまする』

『さりとて案外お堅い事、それほど御心を煩はすべき奴でもないに、さらば何と致して賜はるぞ』

『いや、何と致されても、お渡し申すことは罷りならぬ』

『ならぬとは、この采女に限つての仰せか』

『いや、誰に限らず、されど田原殿には猶更ら以ての事、あの青坊主、さほど欲しくば貴方も一流の武士、お慰みぢや、取るやうにして取つて見られい』